# 三条西公条『吉野詣記』（翻刻・校注）

Sanjyonishi Kinyeda's "Yoshino-moude-ki"

北谷幸冊
鈴木徳男
鶴崎裕雄

## 解題

著者三条西公条は、文明十九年（長享元年、一四八七）五月二十一日、三条西実隆（中納言、後に内大臣）と勧修寺教秀女の間に生まれた。『実隆公記』同日条に「小男誕生、無為自愛々々」とある。『公卿補任』など参照して簡単な閲歴を見ると次の通りである。

長享二年（二歳）叙爵、任侍従。明応六年（一四九七、十一歳）元服、任右近少将。永正二年（一五〇五、十九歳）任蔵人頭、叙正四位上。同三年父実隆任内大臣、ついで辞任。同四年任参議、叙従三位。同七年甘露寺元長女を娶る。同八年任中納言。同九年叙正三位。同十一年兼任大宰師。同十三年父実隆出家（法名尭空、号逍遙院）。同十五年叙従二位。同十八年（大永元年、一五二一、三十五歳）任大納言。大永二年伏見宮邸にて『源氏物語』講釈。同六年叙正二位。享禄二年（一五二九、四十三歳）禁裏にて『古今和歌集』進講。天文四年（一五三五、四十九歳）辞大宰帥、兼任按察使。同六年父実隆（八十三歳）没。同十年任内大臣。同十一年任右大臣。同十二年辞右大臣。同十三年出家、法名仍覚、号称名院。同二十一年室甘露寺元長女没。同二十二年高野・吉野参詣『吉野詣記』。同二十三年比叡山参詣『三塔巡礼記』。同二十四年（弘治元年、一五五五、六十九歳）石山寺参詣『石山月見記』。永禄六年（一五六三）十二月二日没、七十七歳。注釈書に『明星抄』、家集に『称名院歌集』などがある。

『吉野詣記』は天文二十二年（一五五三）二月二十三日、都を発って奈良・高野・吉野・住吉社・四天王寺を尋ね、水無瀬を経て三月十四日に帰京するまでの二十二日間の旅行記である。旅行の範囲は、大和を中心に紀伊・河内・摂津の一部にすぎず、室町時代後期に見られる他の公卿たちのように遠国の大名や国人領主の許に長期滞在する旅行に較べれば、距離も日程も短いものである。しかし、奈良盆地を縦

断し、高野山・吉野山・信貴山に登り、中でも高天寺から山伏姿になって金剛山を極めるなど、六十七歳の老公卿とは思われないような健脚さには驚くばかりである。更に他の公卿の旅行、例えば一条兼良の美濃や越前下向、九条政基の和泉国日根庄（『政基公旅引付』）、正親町三条実望・公兄父子の駿河在国などが、荘園年貢催促や有力大名の庇護を求めた経済的目的にあったのに対し、『吉野詣記』はあくまでも諸社寺参詣と吉野観桜などの名勝探訪を目的とした信仰と風雅の旅なのである。

樋口芳麻呂氏は、冒頭部分を引用・解釈し『昨年の秋はからずも糟糠の妻を亡くし、生きる気分も失せて、ああ修行に出たいと思いながらとかく紛れていたがの意と解される。だから……風雅で気楽な旅であるかのような外見を呈しているが、その社寺参詣には、妻の冥福と己の後生安楽を願う真剣な祈りが秘められていたのであろう」と説く（『奈良県史9　文学』名著出版　昭和五九年）。この樋口氏の見解に更に付け加えたいのが父実隆の旅行の影響である。実隆は、明応五年閏二月に吉野（『実隆公記』）・大永四年四月〜五月に高野山（『高野参詣日記』）へ旅行しており、公条の『吉野詣記』には父の足跡を偲ぶ記述が随所に見える。

当然、文学的興味ある記事が多い。第一日目（二月二十三日条）を見ても、京都から奈良の途中に記す鳥羽・美豆御牧・岩田小野・泉川・柞の杜の地は、みな歌枕である。また業平の筒井筒（二月二十六日条）や『古今集』序の古注に見える初陽毎朝来の梅（三月四日条）などの伝承地探訪や、『饅頭屋本節用集』や『林逸抄』の林宗二との交渉（二月二十五日・三月一日条）がある。三月四日の高天寺での歌、

来てみれば山のかひよりみし雲のうへにたかまのはなはさきけり

では、高天に桜と白雲が付く歌枕の伝統をふまえながら、従来は麓から眺めて想像していた高天の桜を、眼前のものとして詠む。いかにも実地の作を感じさせる。中世和歌とは一味違う詠み方といえよう。

歴史的にも、大和の国人楊本範尭（二月二十七日、二十八日条）や四天王寺執行の秋野氏（三月十二日条）ほか地元有力者との交流、奈良の旅宿の二階建ての家屋（二月二十四日条）、松の枝に茶甕を釣る茶会（三月十日条）など史料として注目すべきである。

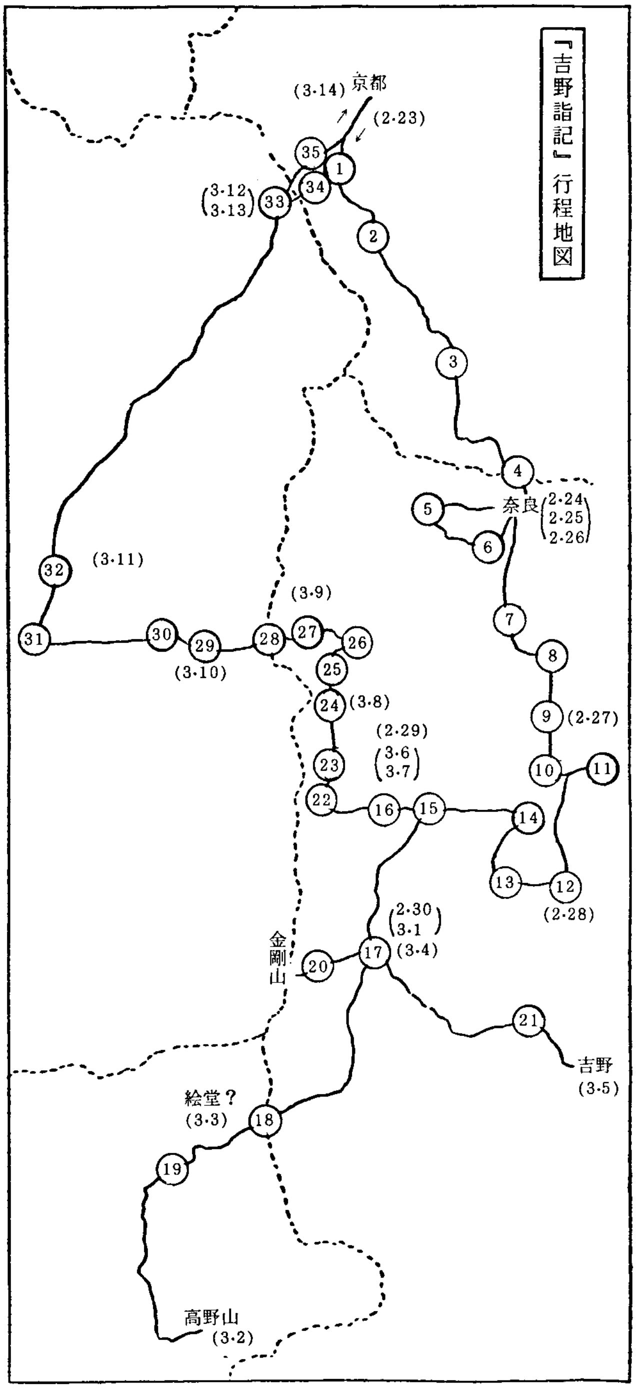
底本に用いた宮川道達編『拾遺意行』は元禄六年の版。跋に「予嘗緝詞林意行集、今又掇其遺者一両篇、名拾遺意行、蓋世人嗜唐土典籍而不愛本邦旧記、陳和詠詩賦風雅篇而喜街談滑稽嬌紅風月書焉、梓人亦費梨棗於稗史雑簡也、尤夥矣嗚呼古人事実瓊章瑤句韜光而空終者誠可惜哉、因喫緊為人而書、　元禄六暦癸酉五月下澣　宮川一翠子跋
癸酉十一月吉旦　永原屋孫兵衛刊行」とあり、『吉野詣記』のほか『厳島詣日記』（今川了俊）、『南遊藁』（策彦和尚）、『乙巳行記』（平岩仙桂）、『会津山水記』（山崎闇斎）の五書が収められている。

## 凡例

一　翻刻については、宮川道達（一翠子）編『拾遺意行』（元禄六年刊）を底本とし、句読点なども底本の体裁に添うよう努めた。但し漢字の旧字体・異体字は現行活字に改めた。

一　校異については、群書類従本（整版本）・東京大学国文学研究室本（本居本）・神宮文庫本の三本を用い、それぞれ〈群〉〈東〉〈神〉と略記した。なお『国書総目録』（岩波書店）には島原松平文庫本・樋口芳麻呂氏蔵本を載せるが、今回はこの両本を見ることができなかった。

一　語釈については、地名・社寺・人物などを取り上げ、単に文献調査にとどまらず、できるだけ現地調査を心がけ、必要に応じ写真を掲げた。なお和歌・漢詩には解釈を試みた。




〈注〉――は行程、①～㉟は所在地、( )内の数字は宿泊の月日、……は国境を示す。
①美豆御牧　②石田小野　③柞の杜　④奈良坂　⑤西大寺　⑥大安寺　⑦柿本寺・在原寺　⑧布留社　⑨長岡寺（長岳寺）　⑩三輪　⑪泊瀬寺　⑫多武峯
⑬橘寺　⑭安部文殊堂　⑮曲河　⑯高田泊瀬寺　⑰室　⑱真土峠　⑲清水　⑳高天寺　㉑六田　㉒当麻寺　㉓染殿（染寺）　㉔片岡清水明王院　㉕達磨寺
㉖法隆寺　㉗龍田　㉘信貴山　㉙八尾木　㉚大聖勝軍寺　㉛住吉社　㉜四天王寺　㉝水無瀬　㉞男山八幡　㉟羽束師森

# 吉野詣記

[1][一]西三条称名院

[二]いにし年の秋はからず。とし比ふしなれたる床はなれ。[2][3][三]かきつくへき心地もなくて。あはれ修行にも出立なばやと思ひつゝとかくまきれしに。[4][四]紹巳とて[五]つくばの道に志ふかくて。此ころ都の住居し侍りて夜ひる[5]きとふらひける。しかもしき島の大和ノ[6]国人にて[六]道たと〳〵しからす。[七]吉野ゝ花見るべきよしいざなひけり。さらはとて人々にいひふるゝ事もなくて。む下にかほしらぬ[7][八]人宗見と云ひと一人をめしつれ。ことし天文廿二年二月廿三日のあした。ひそかに都を出侍るとておもひつゞけける

[九]名残おもふいもせにあへるみちや[8]ありとよしのゝ奥を尋てそとふ

[一〇]鳥羽より[一一]みつの御牧にまかりけるに。近き年々[一二]水のうれへに絶かね[一三]堤塘をきつくとてはる〳〵としわたしたるけふ[9]いとなみけり。此所[10]は[一四]領しける所たるに。[一五]あはれことしは秋もゆたかにて思ふまゝに水の害もさりぬへしと。[一六]夏禹の神助をこゝろにあふきて

[一七]はびこりし水の堤にしるてかのうかりし年の秋もわすれん

[一八]いはたのおのなど云所を過て[一九]天神の森に[11]いたりた[二〇]きゝなといふ所見やり。森のかげなる里にて[二一]駒に水かいをの〳〵うちやすみ。[12][二二]泉川のあたりうち[二三]過柞の杜にいたりて

[二四]春にたにはゝその森はよそよりもわきてかすみもうすき色かな

[二五]奈良坂越て[二六]般若寺の文殊堂に立よりしに。程なく日くれ旅のやとりに夜をあかしけり。

〔校異〕1西三条称名院〈類〉称名院右府公条公〈神〉藤原公条公（内大臣称名院）2〈類〉てアリ。3かきつく〈類〉いく〈東〉かたつく。4紹巳とてつくばの道に志ふかくて〈神〉ナシ。5き〈東〉来り。6国人にて〈類〉国まて。7人〈東〉ナシ。8あり〈類〉ある。9〈類〉もアリ。10は〈類〉そ。11いたり〈類〉いたる。12〈類〉てアリ。

〔語釈〕

**一**西三条称名院　三条西公条については、解題中の著者三条西公条を参照。〔校異〕1で示したように『群書類従』には「称名院右府公条公」とあるが、これは同じ『群書類従』巻三百三十八所収の三条西実隆の『高野参詣日記』に「逍遙院内府 実隆公」に応じたものと思われる。

**二**いにし年の秋　去年の秋、つまり天文二十一年（一五五二）の秋のこと。九月十三日に、公条の妻（甘露寺元長女）が没している。『公卿補任』天文二十一年「（権大納言）正二位三条西同実澄 四十二 九月十三日服解（母）」とある。「とし比ふしなれたる床はなれ」は馴れ親しんだ妻を亡くしたことをいい、帰宅した時の記事（三月十四日条）、「独すみの床もあれて道すがらの物かたりすへきたよりもなければ」に呼応する。

**三**かきつくへき心地　たよりつくべき気持。よりどころとすべき心地。

**四**紹巳　大永五年（一五二五）または四年生。南都出身、興福寺喝食、十九歳出家、上洛して周桂に師事。天文十三年（一五四四）周桂

没後、昌体に師事。この吉野詣の時は二十九歳または三十歳。次で翌年比叡山に、更に翌年々石山寺に、いずれも公条に従って参詣。永禄六年（一五六三）十二月十四日〜十六日『称名院追善千句』を独吟。三好長慶・細川幽斉・織田信長・明智光秀・豊臣秀吉・豊臣秀次らと交遊。『紹巴富士見道記』『紹巴天橋立紀行』『連歌至宝抄』などの著書。慶応七年（一六〇二）四月没、七十八歳または七十九歳。子に玄仍・玄仲がいる。里村北家の祖。

**五**つくばの道　菟玖波の道、連歌の別称、和歌を敷島の道と称すと同じ。『日本書紀』景行天皇四十年の条に、東征の帰途、甲斐国酒折宮において日本武尊が「新治筑波を過ぎて幾夜か寝つる」と唱い、秉燭者が「日日並べて夜には九夜日には十日を」と和した。この唱和を連歌の初めとし、菟玖波（筑波）の道と称する。

**六**たと〳〵しからす　（紹巴は大和の出身であるから）道中は確かである。名所を尋ね歩くに不案内ではない。

**七**吉野　奈良県吉野郡。歌枕。公条一行は三月五日に到着している。万葉のころより行幸の地として歌に詠まれている。吉野山は主として中世ころから桜の名所として定着する。

**八**宗見　未詳。紹巴の知人、あるいは連歌師か。

**九**名残おもふいもせにあへるみちやありとよしのゝ奥を尋てそとふ　いとしい妹の名を負う妹背に出会える道もあろうかと吉野の奥をたずねて旅行くことだ。（妹背は妹背川、妹背山で、大和の歌枕。「名残おもふ」は都を出発するに際しての気持をふくむ。）

**一〇**鳥羽　京都市南区上鳥羽と伏見区下鳥羽の一帯。歌枕。「鳥羽田」として歌に詠まれる。行幸の地で、鳥羽殿が有名。

**一一**みつの御牧　京都市伏見区淀美豆町から久世郡久御山町にかけての地。美豆野、美豆の森とも。歌枕。朝廷の馬を飼う牧場があったところから「駒」とともに歌に詠まれ、「真菰」「菖蒲」も名物。後文に「領しける地」とあるように、三条西家の荘園であった。

**一二**水のうれへ　洪水、水害。

**一三**堤塘　つつみ。堤防。

**一四**領しける所　所領している地。みづの御牧は三条西家の知行地。小野博司「室町後期における三条西家領の伝領と支配」（『法政史学』三五、昭和五八年三月）に詳しい。

**一五**あはれことしは秋もゆたかにて　堤防ができあがれば、今年は水害もなく、みのりの秋には豊作であって。「契りおきしさせもが露を命にてあはれ今年の秋もいぬめり」（『千載集』巻一六雑上・基俊、『百人一首』にも）の表現をふまえる。

**一六**夏禹の神助　古代中国、夏王朝の禹王の神のような助け。禹王は黄河の洪水を治めたといわれる。

**一七**はびこりし水の堤にしゐてかのうかりし年の秋もわすれん　さかんに氾濫していた河水に築いた堤のおかげで、ようやく夏の禹王の神助のように水害がなくなり、あのひどかった年の秋のことも忘れることであろう。（「かの憂かりし」と「夏の禹」を掛ける。）

**一八**いはたのおの　石田の小野。京都市伏見区石田から日野にかけての地。歌枕。『万葉集』に「山科の石田の小野のははそ原見つつか君が山路越ゆらむ」（巻九、一七三〇）とある。

**一九**天神の森　京都府綴喜郡田辺町。当時は興福寺東院領。奈良街道と河内街道の交わるあたりを中心とする一帯で、樹木の生い茂る集落であった。『多聞院日記』天文八年十月二十八日の条に「梅尾明後日開帳、参詣ニ京へ上了、後夜ノ過ヨリ坊ヲ立テ……ハ、ソノ森ノ時分ニテ夜明了、天神ノ森ニテ飯ヲ食テ、ヨマキ行テ伏見ノ渡ヲ上了、ソレヨリ京へ七ノ時分付了」とある。

**二〇**たきゝ　綴喜郡田辺町薪。薪庄は木津の西岸、甘南備山麓にあった。石清水八幡宮領。

**二一**駒に水かひ　馬に水を飲ませて。「駒とめてなほ水かはん山吹の花の露そふ井出の玉川」（『新古今集』巻二春下・俊成）をふまえる。

**二二**泉川　木津川の古名。相楽郡を木津から淀にかけて北北西に流れる。歌枕。ははその森とともに歌に詠まれる例が多い。『新古今集』に「時わかぬなみさへいろにいづみ川はゝそのもりにあらし吹くらし」（巻五秋下・定家）などとある。

**二三**柞の杜　相楽郡精華町祝園、祝園神社の森。泉川の上流にある。歌枕。柞の名から（ははそはなら、くぬぎ、かしわなどの総称）、紅葉や時雨とともに詠まれる例が多い。

**二四**春にたにはゝその森はよそよりもわきてかすみもうすき色かな
ははその森は秋の紅葉の色が淡いと思うが、春でさえ他所よりもとりわけ霞も淡い色であるよ。（『古今集』の「さほ山のははその色はうすけれど秋は深くもなりにけるかな」（巻五秋下・坂上是則）、『後拾遺集』の「いかなればおなじ時雨にもみぢするははその杜はうすくこからん」（巻五秋下・頼宗）などをふまえる。）

**二五**奈良坂　奈良市東北部の丘陵地（奈良山）を越える急坂。平城京東京極大路が北に延びて木津から京都へ通じる京街道。奈良坂越は西の歌姫越とともに京都から奈良に入る主要な街道であった。

**二六**般若寺の文殊堂　奈良市般若寺。京街道奈良坂にある。般若寺の創建については諸説があるが、奈良時代の建立は確かであるとされる。建長年間に十三重石塔、本尊文殊菩薩騎獅像などが造られ、文殊信仰の中心となった。延徳二年（一四九〇）の失火で文殊堂などが焼失（『大乗院寺社雑事記』など）。その後、文殊堂は再建されたが、永禄十年（一五六七）、松永、三好の戦禍によって再度文殊堂などの伽藍を失っている（『多聞院日記』）。なお、それ以後は無事であった経蔵を文殊堂として用いた。現本堂は寛文七年（一六六七）の再建である。

廿四日春日[一][1]社にひそかにまうてけり。[二][2]様をかへて後はけふなんはじめなりける[3]

[三]なれ〳〵し袖はかすみにそのかみをあらすへたつる神かきのうち

[四]立かへりそのかみならぬ袖の色もまたさらめやは春の藤なみ[4]

紹巴[5]

[五]賽後默ニ禱ス道中風雨難一ヲ

雨後ノ餘寒春色微ナリ。白桜未レ発野梅飛。
天ハ其レ一笠山ハ三笠。為ニレ我龍神莫レレ温ス一衣ヲ

是より[六]高円のかたはら[七]羽かひの山の下に[八]客養寺とてこゝろさしふかき

人すみけり。まさ〳〵の興をつくせる事かきりなし。けふは[九]地蔵菩薩の縁日なれは[一〇]弘法大師建立の寺[一一]十輪院にいたれり。[一二]石にきり付られたる仏菩薩歴々として殊勝の霊地なり。やかて[一三]興福寺諸堂[一四]結縁し[一五]東大寺大仏殿をはしめ[一六]八幡[6]にまいり[一七]念仏堂の[7][一八]舎利頂戴し。[一九]二月堂に参りたるに雨すこしふりて笠なととりよせて[二〇]知足院なとみてやとりに帰りにけり。[8]此やと[9]りける家あるし[10]よしある人にて[二一]二階をあたらしくつくりすたれ青やかにかけわたし。向てみれは[二二]伊駒山手にとるはかりむかへり彼かべにかきつけける

[二三]春寒みすたれをしはる梓弓伊駒は雪の花もありや[11]と

[二四]玉すたれあくるいこまの山のはをやとにふしみの春のよの月

紹巴

〔校異〕 1〈類〉のアリ。 2〈類〉傍書「天文十三」アリ。 3ける〈類〉けり。 4さらめやは〈東〉さめやは。 5紹巴〈東〉ナシ。 6〈類〉宮アリ。 7堂〈東〉ナシ。 8「此やとり……」以下「玉すたれ……」の紹巴の歌まで〈類〉ナシ（廿五日の終りにみえる）。 9ける〈類〉たる。 10〈類〉のアリ。 11やと〈類〉けり。

〔語釈〕

**一**春日社　奈良市春日野町。春日大社。御蓋山の西麓に鎮坐する。藤原氏の氏神として発展、道長をはじめとして氏長者の社参だけでなく、一条天皇の行幸以来、たびたびの行幸があった。室町幕府によって式年造替が行なわれ、永徳二年（一三八二）の焼失からの復興にも力を入れた。至徳二年（一三八五）に足利義満が参詣。その後歴代将軍の社参も恒例となる。公条は、『公卿補任』によると、永正十年（一五一三）二月二十日を初度として、同十三年二月二十日、同十六年三月十四日、大永八年（一五二六）二月晦日に春日祭に参行している。また大永七年十二月二十一日に造春社立柱上棟日時定奉行となっている。

**二**様をかへて　公条は天文十三年（一五四四）二月二十七日、二尊院にて出家、時に五十八歳。法名は仍覚。解題参照。

**三**なれ〳〵し袖はかすみにそのかみをあらすへたつる神かきのうち　春日の社に来てみると、着なれた墨染の衣は春霞によって昔を違うものとへだてている、この神垣の内では。

**四**立かへりそのかみならぬ袖の色もまたさらめやは春の藤なみ　ふたたび参詣して、昔とは違う墨染の衣の袖の色をも待っていることであろう、めぐる春に咲く春日社の藤の花は。（「立返り」と「藤波」、「かへり」と「まつ」は縁語。）

**五**賽後黙ニ禱ス道中風雨難ヲ　雨後ノ餘寒春色微ナリ。白桜未レ発野梅飛。天ハ其レ一笠山ハ三笠。為ニ我龍神莫レ温レ衣ヲ。　参拝して道中の風雨の難を祈る　雨が降りやんだ後、余寒があって、春の気配はかすかであり、桜はまだ咲いておらず、野の梅が咲いている。天空はひとつの笠であり、山は三笠山という名だが、わたしのために、龍神よ、旅の衣をぬらすことをしてくれるな。

**六**高円　高円山麓一帯の地。奈良市街地の東南。高円山は白毫寺町の東方にあり、標高約四三二メートルで春日山に対峙する。

**七**羽かひの山　未詳だが、『大和名所図会』には「三笠山、高円山、

若草山の三つをいふぞ」とある。『万葉集』に「春日なる羽易の山ゆ佐保の内へ鳴き行くなるは誰呼子鳥」(巻一〇、一八二七)などとある。

**八**客養寺　奈良市高畑町。現在、隔夜寺が残る。江戸時代中期の絵図には「客養寺丁」の町名が福井町の東にみえる。このあたりにかつて客養寺と号する寺院があり、その興廃は未詳であるが、隔夜堂がその余風を伝えていたという(『奈良坊目拙解』)。

**九**地蔵菩薩の縁日　地蔵菩薩の功徳をたたえ救いを願う日。毎月二十四日。平安時代中ごろ地蔵信仰が盛んになるとともに定着。地蔵菩薩は仏陀入滅から弥勒菩薩出現までの時代に衆生済度する菩薩。公条がこの日参詣する十輪院、東大寺念仏堂、知足院は地蔵菩薩を本尊としている。

**一〇**弘法大師　空海(宝亀五年〔七七四〕—承和二年〔八三五〕)の勅謚号。真言宗の開祖。

**一一**十輪院　奈良市十輪院町。元興寺の一院。寺伝によると右大臣吉備真備の長男朝野宿称魚養の建立、弘仁年間に弘法大師が留錫し、本尊の石造地蔵菩薩を造立したという。室町時代末までに院領三百石、境内東西三丁南北二丁を有していた。天正十三年(一五八五)豊臣秀長に院領を没収され、また兵乱によって一時荒廃する。なお、『沙石集』に知足院、福智院などとともに霊験あらたかな地蔵のあったことが記されている。

**一二**石にきり付られたる仏菩薩　十輪院の本堂内に石仏龕(仏像を納める厨子)があり、正面奥に地蔵菩薩石像を安置する(写真参照)。



左右の壁面には十王像、脇侍として釈迦、弥勒の像、東側面に聖観音立像、西側に不動明王像などが彫刻されている。

**一三**興福寺　奈良市登大路町。藤原氏の氏寺。平城遷都とともに現地に移転し、興福寺として官寺の扱いをうける。平安初期には完成した伽藍は、治承四年の平家による焼打の被害を最大のものとして、その前後に再三の火災にあい、そのたびに復興している。室町時代では応永十八年(一四一一)、落雷で五重塔、東金堂、大湯屋、春日東西塔が焼失(『東院執行日記』など)、数年後に再建されている。なお、享保二年年(一七一七)の大火以前の諸院諸坊の状況は『興福寺伽藍春日社境内絵図』(宝永五年)によって知られる。

**一四**結縁　Qechiyen　自分の霊が救われ、良い報を得たいという意図のもとにする寄進、または慈善の行為(『日葡辞書』)。ここは参拝する意である。

**一五**東大寺大仏殿　奈良市雑司町。東大寺金堂。木造建築としては世界最大級。現在のものは宝永六年(一七〇九)の再建。堂内に本尊盧舎那仏が安置される。本尊は天平勝宝四年(七五二)に開眼供養が行なわれ、大仏殿はその前年に造営された(『東大寺要録』)。治承四年(一一八〇)の焼打で大仏殿はじめ東大寺の諸堂は壊滅的被害をうける。その後、かなりの長年月を要しているが相次いで本尊の修復や諸堂の復興が行なわれている。大仏殿の供養は炎上から十五年後の建久六年(一一九五)であった。なお、永禄十年(一五六七)の兵乱で再び大仏殿など焼失、この時、大仏殿再興まで約百四十年かかってい

る。その間、応急修理された本尊は露仏のままであった。

**一六**八幡　手向山八幡宮。東大寺八幡宮のこと。東大寺の鎮守、手向山神社。治承四年の焼打炎上後、嘉禎三年（一二三七）、中門南東の鏡池の東にあったが、千手院岡に遷され、頼朝によって再建。

**一七**念仏堂　東大寺の一堂。鐘楼の東にある。本尊は、嘉禎三年（一二三七）の造立である地蔵菩薩である。なお、『和州旧跡幽考』に「又浄土院と号す（舎利塔銘）本尊地蔵菩薩」とある。

**一八**舎利頂戴　舎利を拝しいただくこと。舎利は釈迦仏の遺骨で、供養礼拝すると功徳があると伝える。なお、念仏堂の舎利について、『南都七大寺巡礼記』に「浄土堂号二東大寺別所一東向三間四面堂、号二念仏堂一……舎利十三粒内一粒者聖武天皇御持也」とある。

**一九**二月堂　東大寺の一堂。天平勝宝四年（七五二）の創建。現在の建物は寛文九年（一六六九）の再建。本尊は十一面観音。修二会（お水取）が行なわれる。

**二〇**知足院　東大寺の塔頭の一。境内の東北にある。本堂の木造地蔵菩薩立像は鎌倉初期の作。なお、『東大寺中寺外惣絵図』（江戸初期）に多くの塔頭の状況が知られる。

**二一**二階をあたらしくつくり　当時、仏閣や楼門を除いて一般の家屋としては二階建ての築造は珍らしい。和泉堺の『菅原神社文書』大永五年（一五二五）の風呂屋敷禁制条々に「一、面ニ二階ヲ作同西請作事」とあるのは早い例。『耶蘇会日本年報』には慶長の頃、日比屋了慶が「亙葺三階の家を造りし」とある。同じ頃の『職人尽絵』（喜多院本）に二階造りの蒔絵師や縫取師・甲冑師の家屋が描かれている。このように二階造りが商人の家に多いことは、奈良における公条一行の旅宿の家主の職業を推量する資料となろう。

**二二**伊駒山　生駒山。奈良県生駒郡生駒町。河内と大和の境をなす山。標高約六四二メートル。歌枕。

**二三**春寒みすだれをしはる梓弓伊駒は雪の花もありやと　春はまだ寒いのですだれを張り出している、その向こうに見える伊駒山には雪の花もあるのかと思いながめる。（「をしはる」、「梓弓」、「伊（射）駒山」は縁語。「梓弓」は伊駒の枕詞。）

**二四**玉すだれあくるいこまの山のはをやとにふしみの春のよの月　宿ですだれをあげて伏しながら眺めると、伏見の里に伊駒の山の端にあがった春の夜の月が照っている。（「ふしみ」は地名の伏見を掛ける。菅原の伏見は二十五日にみえる。）

廿五日けふは[一]ことさら丑[1]の日にあたれり。聖廟[二][2]御法楽としく〳〵内裏にまいりしも。けふは[3]御いとまたまはりてさふらはさりけれは

[4][三]梅にまつにほひをこせよ八重さくら
[四]かすみにふかき庭の山[5]かせ

かくて一二句つゝ申あひ道中[五]にて百何[6]を[7]終けり[8]。是よりさ[六]ほ姫の社に参りしに。そらことの外にさへかへりて風[9]ふきあれけり[10]

[11][七]ゆく袖に川風[12]さむみさほ姫の霞の衣我にかさなん

返事[13]に

[八]さほひめはよしかさすとも雲[14]かすみたえまの日影衣にはきん

[15]とて[九]眉間寺にまいりしに。[一〇]糸桜さかりなり

紹巴

[一一]ぬきとめぬ露の匂ひも春かせのはなは柳[16]のいとにみたれて

と有しかは

[一二]糸による名をくりかへし花さくらうちちる露もぬきてとゝめよ[17]。

はるかにのほりてみるに

[18][一三]又や見む遠山眉のひまく／＼に霞をわくる[19]春風そふく。

[一四]不退寺にいたりて業平自筆[一五]の影あり。おぼろけにはひらかさるよし申せしを。宗二[一六]とてかのあたりの知人にてよくいひより拝見せしに。容顔の美麗端正なるうつゝの人にむかふかことし

[一七]春やむかし我身ひとつはとはかりにいひしやけふもむかふおもかけ。

これより法華寺[一八]海龍王寺[一九]超勝寺[二〇]西大寺[二一]にまいりて。かの遍昭[二二]のいとよりかけてとよめる柳むら／＼みえたり。永日は暮やらて菅原[二四]のふしみにいたれり。菅丞相[二五]降誕の跡とてちいさき梅木なとありてみしめ引わたしたる跡あり。招提寺[二六]薬師寺[二七]大安寺[二八]元興寺[二九]など結縁し。又宿所に帰りにけり。やつれたる姿もはゝかり忍ひ[20]たりしに大乗院[三〇]よりうち／＼聞付てをとつれたる人ありけれは、ひそかに夜にまぎれてあひ奉りて帰ぬ[21]。

〔校異〕 1丑〈類〉ナシ。2〈東〉のアリ。3は〈東〉ナシ。4〈東〉発句・脇分ち書きせず。5山〈類〉春。6句〈類〉韵。7を〈類〉〈東〉ナシ。8けり〈類〉ける。9風ふき〈東〉吹風。10けり〈類〉たり。11〈類〉この歌紹巴の作とする。12さむみ〈類〉さむし。13返事に〈類〉とよめりける返事に〈東〉かへし。14雲〈東〉春。15とて〈類〉ナシ。16柳〈類〉桜。17よ〈類〉〈東〉ん。18又や見む〈類〉あさみとり。19わくる〈東〉わたる。20〈東〉居アリ。21〈類〉廿四日の後部「此やとり……」以下「玉すたれ……」の紹巴の歌までアリ。

〔語釈〕

**一**ことさら丑の日　天文二十二年二月二十五日は辛丑にあたる。「ことさら」とあるのは、二月二十五日が菅原道真の命日にちなむ天満天神の祭りの日であり、丑（牛）は天満天神の神使であることをいう。

**二**聖廟御法楽　聖廟は道真をまつった廟、北野社をさす。後奈良天皇の内裏では二月二十五日に聖廟法楽百韻が行なわれ、いくつかの連歌が現存する（木藤才蔵『連歌史論考』「連歌史年表」参照。）

**三**梅にまつにほひをこせよ八重さくら　梅の方から先ず美しく咲き出しておくれ、そして奈良にふさわしい八重桜が咲く。（聖廟法楽にふさわしく道真の「こちふかばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春をわするな」〔『拾遺集』巻一五恋五〕をふまえる。八重桜は奈良に付く。「いにしへのならのみやこの八重桜けふここのへににほひぬるかな」〔『詞花集』巻一春・伊勢大輔、『百人一首』にも〕とある。）

**四**かすみにふかき庭の山かせ　春霞の深くたちこめた庭に吹く山風よ、梅の方に向かって先ず吹いておくれ。

**五**道中にて百句を終けり　三月一日条に「廿五日の道中にて両吟事終りぬ。」とある。公条と紹巴の両吟百韻は道中の所々でつなぎ、七

日間にわたり続けられたことになる。

**六**さほ姫の社　佐保姫神社。奈良市今在家町。多門へ通ずる小道の傍らにあった（『平城坊目遺考』）。現在、佐保川地蔵堂の横に社殿が残る。祭神は天棚機姫神。

**七**ゆく袖に川風さむみさほ姫の霞の衣我にかさなん　旅行く袖に佐保川の川風が寒いので、春の女神である佐保姫の霞の衣をわたしに借してほしい。（「佐保姫」「霞」は春の縁語。）

**八**さほひめはよしかさすとも雲かすみたえまの日影衣にはきん　佐保姫はたとえ借してくれなくても雲霞の絶えた間からさすあたたかな日の光を衣として着よう。

**九**眉間寺　奈良市法蓮町。聖武天皇陵の東南にあったが、明治の廃仏毀釈によって廃寺となって現在は残っていない（「眉間寺跡」の石碑がある）。東大寺戒壇院末寺。本尊は地蔵菩薩、後に阿弥陀如来。室町時代中ごろ一時衰退したが文正元年（一四六六）に復興。『大和名所図会』に境内の絵図が載る。

**一〇**糸桜　しだれ桜。

**一一**ぬきとめぬ露の匂ひも春かせのはなは柳のいとにみたれて　ぬきとめることのない露を輝やかせて吹く春風に桜の花も柳のように糸となって乱れ咲いている。

**一二**糸による名をくりかへし花さくらうちちる露もぬきてとゝめよ

糸桜という糸にちなむ名のあるしだれ桜よ、糸をよってくり返し散り乱れる露も糸に通してぬきとどめよ。（「因る」と「縒る」を掛ける。「糸」「よる」「くる」「ぬく」は縁語。）

**一三**又や見む遠山眉のひま〳〵に霞をわくる春風そふく　この景色を再びながめたいものだ、遠くの連山が眉墨をしたようにうっすらとみえる間々に霞を分けて春風が吹くことよ。（「遠山眉のひまひま」の「眉のひまひま」に眉間寺の「眉間」を掛ける。眉間寺からの眺望を詠んでいる。）

**一四**不退寺　奈良市法蓮町。不退転法輪寺。創建は勅願によって在原業平が建立したとされ、譲位後の平城天皇が入御し、その後皇子阿保親王、その子業平が居住。したがって、業平寺とも呼ぶ。南大門は正和六年（一三一七）に上棟、本堂は、寛正五年（一四六四）の火災の直後に再建。

**一五**業平自筆の影　不退寺には現在も業平の肖像画が伝わる。この画像のことか（写真参照）。

**一六**宗二　林宗二、饅頭屋宗二。明応七年（一四九八）生、天正九年（一五八一）没。八十四歳。建仁寺の龍山徳見に従って来朝し知足院に入った林浄因を祖とする。六代の孫。宗二は、牡丹花肖柏に連歌を学び、古今伝授をうけたといわれる。清原宣賢に漢学を学び、三条西実隆にもついている。『源氏物語』の注釈『林逸抄』を述作、『饅頭屋本節用集』を著わす。なお、永島福太郎『中世文芸の源流』（昭和二二年）、川瀬一馬「饅頭屋林宗二に就いて」（『ビブリア』I、昭和二四年）、井上宗雄『中世歌壇史の研究　室町後期』（昭和四七年）など参照。この吉野詣の時は五十四歳。現在、漢国神社（奈良市漢国町）内に林浄因をまつる林神社があるが、そのあたりに宗二の住居があったという。

**一七**春やむかし我身ひとつはとはかりにいひしやけふもむかふおもかけ　かつて業平は春や昔我身ひとつはというように詠じたことよ、その業平の面影に今日も相対している。（「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」〔『古今集』巻一五恋五・業平〕をふまえる。）

**一八**法華寺　奈良市法華寺町。法華滅罪寺。平城京左京一条二坊にあった不比等の旧邸を光明皇后が宮とし、天平十七年（七四五）五月に宮寺となった（『続日本紀』）。

**一九**海龍王寺　奈良市法華寺町。法華寺の東北隅にあったところから隅寺といった。また角寺、隅院、脇寺。

**二〇**超勝寺　超昇寺。奈良市佐紀町。鎮守であった佐紀神社の東北にあった。平城天皇皇子真如親王によって創建。後に興福寺末寺。なお、明治に廃寺となった後、歓喜寺（二条町）などに什宝物が移された。

**二一**西大寺　奈良市西大寺芝町。創建は天平宝字八年（七六四）の称徳天皇の鎮護国家祈願にはじまる。当初は建物百十数字に及ぶ大伽藍であった（『西大寺資財流記帳』）が、元永のころには、大破し「天下衆人大歎合」状態となる（『中右記』）。文暦二年（一二三五）の叡尊入寺以後、復興したが、文亀二年（一五〇二）の兵火で一山焼亡し、四王堂、中門、石塔院、地蔵院、東大門が焼け残った（『大乗院寺社雑事記』）。本堂の再建は宝暦二年（一七五二）である。南部七大寺の一。

**二二**遍昭　僧正遍昭、花山僧正。六歌仙の一人。弘仁七年（八一六）―寛平二年（八九〇）。『花山私記』、『金剛界私記』などの著、家集『遍昭集』があり、『古今集』初出の歌人。

**二三**いとよりかけてとよめる柳　『古今集』に「西大寺（にしのおほてら）のほとりの柳をよめる」と詞書のある遍昭作の「浅緑いとよりかけて白露を珠にもぬける春の柳か」（巻一春上）の歌をいう。この西大寺は京都（平安京）の西寺（現存しない）をさすが、中世の『古今集』の注釈書は例えば「西大寺ト云ハ奈良ニアリ光明皇后宮ノ建立寺也彼寺ノ柳ハ彼ノ皇后宮ノウヘ給ヘル柳也」（『毘沙門堂本古今集註』）、また「西大寺、此寺、大和也。光明皇后建立也。柳多所也」（『蓮心院殿説古今集註』中世古今集注釈書解題四）などとあるように、奈良の西大寺とする。なお、謡曲『百万』なども遍昭作を引歌とした表現を奈良の西大寺での詠の意としてひいている。

**二四**菅原のふしみ　菅原の伏見。奈良市菅原町。歌枕。土師氏、後の菅原氏の本拠地で、菅原神社（菅原天満宮）、菅原寺（喜光寺）があるあたり。

**二五**菅丞相降誕の跡　菅丞相は道真のこと。菅原神社の東南に菅家旧館があったといわれ、現在、池中の島に道真の産湯池と伝える碑文が残っている。

**二六**招提寺　唐招提寺。奈良市五条町。唐僧鑑真和上によって開創。『招提寺建立縁起』（承和二年）によって平安時代はじめころの伽藍の様子が知られるが、以後、地震火災の被害にあっている。

**二七**薬師寺　奈良市西ノ京町。平城遷都の時、藤原京の本薬師寺を現在地に移転。本尊は薬師如来。南都七大寺の一。

**二八**大安寺　奈良市大安寺町。聖徳太子御願の熊凝道場にはじまる。その後、百済大寺、大官大寺をへて平城遷都にともない左京六条四坊の地に移転。本尊は十一面観世音菩薩。三論学問寺として栄えた。南都七大寺の一。

**二九**元興寺　奈良市芝新屋町。飛鳥寺が平城遷都にともない別院を建立したのがはじまり。八世紀ころには伽藍も整備されて栄えたが、宝徳三年（一四五一）の徳政土民蜂起によって多くの建物が焼失し、境内は民家や耕地となった。「当時ハ南北四町　南大門南方也北至猿沢池之南東西二町」（『大乗院寺社雑事記』文明十五年〔一四八三〕九月十三日条）とあり、このころ興福寺の管理下にあった。南都七大寺の一。

**三〇**大乗院　興福寺の門跡寺。興福寺の別当を一乗院と交互に門主が兼ねた。ここでは門主尋円のこと。九条尚経（後慈眼院）息。経尋舎弟。この吉野詣の時は三十四歳（『興福寺別当次第』など）。尚経室は三条西実隆女保子（公条の姉）であるので、保子が母とすれば、公条と尋尊は叔父甥の間柄である。

廿六日は在原寺[一]柿本寺[二]（人丸塚と号す）木像の人丸おはしけり

けふそみること葉は筆にかきのもと本よりくちす残る姿を[三]

道すこし行てある女わらへにとひけれは。昔のつゝいつゝ[四]井筒にかけしとよみし井のもとなとをしへける。かたのことく残れり[五]いそのかみふる野ゝ田つらを行てふるの社[六]を拝て

紹巳



[一七]分なれし木かけなからもまとふかなあとはふる野ゝ花の中道[1]

[八]さく花にけふこそわくれ七十にちかきも[2]あはれふるの中みち。[3]

[九]内山にてしはらく足をやすめ長岡寺[4][一〇]（釜口と号す　愛染明王）におもむき二夜をあかしけり。比寺の外護[5][一一]楊[6][一二]本とてやさしき[7]なさけふかし。[8][一三]浮屠は桑下の三宿をだにいましめられしに比楊本こそ千夜をもあかすへきやとりとは覚[9]え侍れ。[一四]よるの白浪音せす二六時中[一五]愛染明王[一六]の不退の供養護持の事[10]もたのもし

[一七]里人のとかなくて[11]しもおさむらん蒲のくちぬる名さへ聞えて。

廿七日本堂に参りて

[一八]愛染堂前花繞ル松ヲ　方池亀出テ水溶々

忽チ除二業障一ヲ洗二煩悩一ヲ　十二時中不退ノ鐘

又寺に帰りて夜に入て楊[12][一九]本範尭といふ盃さし出あそひけり。

〔校異〕　1〈類〉この歌は「さく花に……」の歌のあとにアリ。2〈類〉「六十七」の傍書アリ。3〈類〉とありしかはアリ。「分なれし……」の歌に続く。4長岡寺〈類〉長岳寺。5外護〈類〉護、「イ外」の傍書アリ。〈神〉「ゲゴ」の傍書アリ。6楊〈類〉柳、「イ楊」の傍書アリ。7やさしき〈類〉やさしく。8〈類〉凡アリ。9〈東〉ナシ。10事〈類〉ちから。11てしも〈東〉しても。12楊〈類〉柳。

〔語釈〕

**一**在原寺　天理市櫟本町。市場垣内に鎮守社在原神社とともにあったが明治初年廃寺となる。在原神社は業平社ともいわれるが、その境内に現在も『伊勢物語』の筒井筒の伝承の井戸が残る。

**二**柿本寺　天理市櫟本町。和爾下神社の境内に寺跡がある。奈良時代の創建といわれ、東大寺の末寺であった（『東大寺要録』）。人麻呂の墓所、人丸塚があり、その様子は『柿本朝臣人麻呂勘文』（寿永三年）、『無名抄』（鴨長明）などから知られる。和爾下神社は治道天王社、治道社と呼ばれ、柿本寺はその神宮寺であった。室町時代ころ、西に移転、現在の櫟本町高品の地で、公条のころはこの地にあったかと考えられる。いま、神社内（和爾下神社古墳の西の陪塚）に歌塚の碑が残る。

**三**けふそみること葉は筆にかきのもと本よりくちす残る姿を　今日こそみることができた、歌聖といわれる柿本人麻呂の、以前から朽ちることがない木像の姿を、このことを歌にのこしておこう。（「こと葉に書き」と「柿の本」を掛ける。）

**四**つゝいつゝ井筒にかけしとよみし井　『伊勢物語』二三段で「ゐなかわたらひしける人の子」の男が女によみかけた「つゝゐづゝゐづつにかけしまろがたけすぎにけらしないもみざるまに」の歌をいう。

**五**いそのかみふる野　石上布留野。天理市石上町。歌枕。天理市街南方を流れる布留川の上流一帯をいう。

**六**ふるの社　石上神宮。天理市布留町。主祭神は布都御魂大神、平国剣である。

**七**分なれし木かけなからもまとふかなあとはふる野ゝ花の中道　ふみ分けなれた桜の木蔭の道であるけれども迷っていることよ、先人たちの足跡も古びている布留の地の、その花咲く中道を行くと。（「中道」は山の辺の道から布留社をぬけて布留川にそって行く道で、滝本、長滝、福住にいたる。歌枕。「経る」と「布留」を掛ける。

**八**さく花にけふこそわくれ七十にちかきもあはれふるの中みち　咲いている桜のもとを今日、踏み分けて歩むことよ、はなやかさの中で七十歳に近い老いの身を知りあはれと思いながら布留の中道を。

**九**内山　天理市杣之内町。興福寺大乗院方領荘園。永久寺があった。永久寺は、大乗院頼実の隠居所としてはじまり、尋範によって拡張整備され、鎌倉時代には谷々にわたって堂塔坊舎が建てられ偉容をほこった。その後、明治初年に廃寺となるまで興福寺末寺として栄えた。いまは園池がわずかに残るのみ。

**一〇**長岡寺　釜口山長岳寺。天理市柳本町上長岡。日本武尊の十男釜見王の廟所跡に弘法大師が建てた寺が起こりだという（『大和陳迹名鑑図説』）。鎌倉時代には興福寺大乗院末寺となった。応仁の乱で被害を受け、また文亀三年（一五〇三）に仏閣炎上している（『大乗院寺社雑事記』二月十七日条）。

**一一**外護　仏道修行に必要なものを供給して安穏を与える人。ここは大乗院方の国人として末寺の長岳寺を護ることをいう。

**一二**楊本　楊本庄の下司公文であった在地の大乗院方国人楊本氏で、伊射奈岐神社西北に居館があったという。ここは、後出の範尭のこと。

**一三**浮屠は桑下の三宿をだにいましめられし　仏者は桑樹のもとに三宿をすること（ほどこしをうけるの意）を戒しめられた。『後漢書』に「老子入夷狄為浮屠、浮屠不三宿桑下、不欲久生恩愛、精之至也（下略）」（襄楷伝）とあるのを典拠とする。

一四よるの白浪　白浪は盗人。
一五二六時中　一日中。
一六愛染明王　愛欲を本体とする真言密教の神。長岳寺境内の方池をはさんで北に本堂があり、南に愛染堂跡がある。
一七里人のとかなくてしもおさむらん蒲のくちぬる名さへ聞えて　里人の罪がなくても修行するのだろう、蒲が朽ちたという評判までも知られている。(「蒲の朽ち」と「釜の口」を掛ける。故事をふまえると考えられるが不明。)
一八愛染堂前花繞レ松ヲ　方池亀出テ水溶-々　忽チ除二キ業障一ヲ洗二フ煩悩一ヲ　十二時中不退ノ鐘　愛染堂の前の桜は松の木をめぐるようにして咲いている、方池の亀が顔を出し、水は溶々として湧き出ている、すぐにも悪業罪障を除き煩悩を洗い流してくれるところの、十二時中おこたることのない鐘の音が響く。
一九楊本範尭　楊本庄を本拠とする国民。注一二参照。範尭の名は『大和郷士記』(『国民郷士記』)にみえる。

廿八日[1][一]橋本大神にまいり。[2][二]あなし川をわたり[三]檜原[四]大御輪寺にまいりたりしに。寺のさまうるはしくよのつねの作りさまあらず。くさびなといふ物をもちゐずつくれるさま物語せり。かたはらに[五]三輪明神の王子[3]入定の所あり。王子宝殿に[4]飛いらせ給ひしときの[六]両足の跡顕然としてあり。錦にて[5]おほへり。ひらき[6]みるに其跡いさゝかふみちかへ[7]り。[8][七]現当を表し[9]給ふ由神秘なと語り[10]けり。殊勝の事ともなり。是より[八]三輪にまうてけるに神前のさまことさら神さひたるに[九]苔むしろ草莚しきて。彼範尭盃さしいて比所の[一〇]はしつかとて名有物なるよし申て。寒食の糕[11]端午の粽とりぐしたる物さし出て。酒しゐそ[12]して思ひつゝけるよし申けり

[一一]年ふとも又や待[13]見ん三輪の山はなの都の袖のにほひを

とりあへす

[一二]うちとくる心もあやし三わのやまたつぬる我をしる人にして

ふかくたれとなくて過ぬるを見顕しけるにやとて

紹巴

[一三]花の香はとかむはかりも[14]三輪の山しかもかくるゝ人のかたち[15]を。

是より範尭は帰にけり。[一四]さのゝわたり過るほど風いたく吹てあま風に[16]やなと申ければ。空は一点の雲もなし

[一五]俄にもふりこむ雨の雲もなしこまうちわたす佐野ゝ夕風。

[一六]かくてつは市より[一七]泊瀬寺にまいりぬ。所のさま[一八]源氏物語にかけりさなからにてしばし花の蔭に立よれは。誠に波ぢにむかふ心ちせしかは

[一九]こきよせよ花のしら波海士小舟はつせの山のはるの夕風

[二〇]本尊の御前に参る。[17]折しも歌うたへる女[二一]二人法楽とおぼしくて哥うたへるあり。その詞に花の都人歌よませ給へやといふを。うちきくよりまことに花のみやこ人は[18]紛れなけれは[19]と歌よみなん事はむねつふれていよ〳〵口をそとぢける。しはらく念誦して本尊に向ひ奉れり。寺はいまた[二二]周備の姿もみえす造畢せしめは[20]閉帳あるへきをまのあたり拝[21]見しけるも有難くなん。かくて[二三]八塩の岡[二四]二本の杉より川をわたり[二五]多武峯ある坊につきぬ。

〔校異〕　1橋本大神〈類〉柳本太神。　2〈類〉てアリ。　3〈類〉のア

り。4飛〈類〉とち。5おほへり〈類〉覆あり。6〈類〉てアリ。7り〈類〉たり。8現当〈類〉顕当。9給ふ〈類〉給ひし。10けり〈類〉り。11糕〈類〉あめ。12そ〈類〉す〈東〉など。13待〈神〉ふし。14も〈東〉に。15かたち〈類〉袂。16に〈類〉て〈東〉か。17参る〈類〉〈東〉まいり。18は〈東〉ナシ。19は〈類〉〈東〉ナシ。20は〈神〉て。21拝見しける〈類〉おかみ奉る〈神〉〈東〉拝見し奉る。

〔語釈〕

**一**橋本大神　楊本天神の誤りか。楊本天神は伊射奈岐神社のこと。天理市柳本町。楊本の総鎮守。寛正二年（一四六一）に大乗院尋尊が参詣している。「巳剋出長谷寺了先御堂ニ参了。於楊本天満社拝殿下司一献進之」（『大乗院寺社雑事記』四月六日条）。

**二**あなし川　穴師川、巻向川のこと。巻向山に発し、三輪山北麓を西流、初瀬川に合流する。歌枕。

**三**檜原　北は巻向川、南は玄賓谷に区切られる台地で、三輪山の西北にあたる。歌枕。三輪山麓の山の辺の道沿いに大神神社の摂社、檜原神社（桜井市三輪）がある。『大神神社古絵図』（室町時代）に大鳥居、拝殿、堂舎などが描かれている。笠縫邑の伝承地。

**四**大御輪寺　桜井市三輪。大神神社の神宮寺。二の鳥居を北に入った所の大直弥子（おおただねこ）神社（若宮）がその跡。古くは大神寺、三輪寺とも呼ばれた。応永十九年（一四一二）に大殿、宝塔などの修理があった（『三輪山神宮大御輪寺記』）。江戸期では本堂、三重塔、護摩堂、経蔵、鐘楼、廻廊などがあった（『磯城郡誌』など）。明治二年に廃寺。



**五**三輪明神の王子入定の所　大神が活玉依姫と通じて生まれた王子が十余歳で室外に両足の跡を残してその身を隠したという説話（『三輪山神宮大御輪寺記』など）による。なお、『大和名所図会』巻四では「垂仁天皇の御宇、三輪明神の通はせたまひし女、いくほどなくして子をうめり。その子十歳ばかりまで常の人のごとくして何の奇特も見えざりしが、あるとき博覧の人ありて、かけまくもかたじけなき明神の御子にておはしますよしいひふるる。よりて大三輪寺の丑寅（うしとら）のすみに入定したまふ。末代に奇特を見せんとて、敷板に御足の跡をのこしたまふ。その跡今にあたたかなり。『太子伝撰集抄』に見えたり。この所にもかくぞいひつたへける」とある。『太子伝撰集抄』は寛文元年刊の聖徳太子の伝記。

**六**両足の跡　大直弥子神社境内に仏足石として現在も伝えられている。注五参照。

**七**現当　Guentô 現世、すなわち、現在の世と未来の世と（『日葡辞書』）。

**八**三輪　大神神社。三輪明神ともいう。桜井市三輪。三輪山を神体と拝する、わが国最古の神社といわれ、大和国一宮。『延喜式』神名帳に「大神大物主神社」とある。『大神神社古絵図』（室町時代）によって、拝殿、大鳥居など、当時の状況がうかがえる。

**九**苔むしろ草莚　Coqemuxiro 隠者・堂守とか野原で暮らす人とかが、その上に寝る苔、または草。Cusamuxiro 草で編んだ筵、また詩歌語、家を出てよそにいること。また野外に寝ること（『日葡辞

書』）。

**一〇**はしつか　箸塚。箸中村のこと。箸中の名産として飴粽（あめちまき）が知られている。『大乗院寺社雑事記』長禄三年（一四五九）五月二八日の条に大乗院方に属する四十二の座を挙げているが、そのなかに「アメチマキ　箸ノツカ」とみえる。アメチマキというのは一種の唐菓子で、本文の「寒食の糕端午の粽とりぐしたる物」がそれにあたる。

**一一**年ふとも又や待見ん三輪の山はなの都の袖のにほひを　花の都人の袖の匂いを、年を経ても再び待ち見ることですよ、この三輪の山で。（楊本範尭の作。花の都の袖の匂ひは公条のことを指している。）

**一二**うちとくる心もあやし三わのやまたつぬる我をしる人にして　うちとけあっている心も不思議なほどだ、三輪の山を尋ねてきたわたしを案内してくれた人でありながら。

**一三**花の香はとかむはかりも三輪の山しかもかくるゝ人のかたちを　咲く花のように都人の袖の香はとがめるほどに見あらわれたことだ、この三輪山に、このように隠れ忍ぶ人の姿を。（『万葉集』の「三輪山をしかも隠すか雲だにもこころあらなも隠さふべしや」（巻一、一八　額田王）や『古今集』の「三輪山をしかもかくすか春霞人に知られぬ花や咲くらん」（巻二春下・紀貫之）をふまえる。）

**一四**さのゝわたり　佐野渡。三輪山南麓の初瀬川付近を三輪が崎と伝える。『万葉集』の「苦しくも降りくる雨か三輪が崎佐野の渡に家もあらなくに」（巻三、二六七、意吉麻呂）をふまえる歌枕。この万葉歌を本歌とした『新古今集』の「駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮」（巻六冬・定家）などがある。『五代集歌枕』『八雲御抄』などの歌学書や謡曲『鉢木』など、中世では大和国の歌枕とするが、現在は紀伊国の歌枕とされ、新宮市の三輪の崎をいう。

**一五**俄にもふりこむ雨の雲もなしこまうちわたす佐野ゝ夕風　急に降ってくる雨雲もなく晴れている、夕風に吹かれて佐野の渡を馬で歩むことだ。（注**一四**に掲出の定家作をふまえる。）

**一六**つは市　海柘榴市または椿市。桜井市金屋。金屋から三輪にかけての古代の市場。平安時代以来、長谷寺参詣の宿泊地として栄えた（『枕草子』『蜻蛉日記』など）。

**一七**泊瀬寺　長谷寺。桜井市初瀬。『長谷寺縁起文』（鎌倉時代）によると、僧徳道が聖武天皇の勅を受け、霊木でもって本尊十一面観音像を造立、天平五年（七三三）に開眼供養が行なわれたと伝える。その後、観音の霊験はあらたかで、長谷詣が盛んになったが、十度余の大火にあっている。室町時代では明応四年（一四九五）十一月二十二日兵火により全伽藍焼失、本尊の再興は明応七年である（『大乗院寺社雑事記』）。天文五年（一五三六）六月二十九日、観音堂が本尊とともに焼失、天文七年に本尊の再造立が終っているが（『長谷寺古記』）、本堂の再建は慶安三年（一六五〇）六月の落慶である。

**一八**源氏物語にかけり　「玉鬘」の巻にみえる。

**一九**こきよせよ花のしら波海士小舟はつせの山のはるの夕風　桜花の白波にゆられる漁夫の小舟を漕ぎ寄せるように吹けよ、初瀬の山の春の夕風よ。（「あま小舟」は「はつ」にかかる枕詞。）

**二〇**本尊　十一面観音像。天文七年（一五三八）造立のもの。現在

の本尊である（像内頭部墨書銘による）。

**二一**女二人　『源氏物語』では玉鬘とその母夕顔にかつて仕えていた右近が偶然出会いともに長谷寺に参詣する展開になっている。ここはそれをふまえるか。

**二二**周備　当時、観音堂は焼失して再建されていなかった。注**一七**参照。周備は完備するの意。

**二三**八塩の岡　未詳だが、『名所方角抄』に「八塩(やしほ)山　岡　初瀬近所也　山城にも同名あり　紅葉つゝしよめり」として「紅の八塩の岡の紅葉ばをいかに染めよと猶しぐるらむ」（『新勅撰集』巻五秋下・伊光）を引く。なお、『和州巡覧記』に「初瀬山秋冬は紅葉甚うるはし。旅客諸人の多く遊観造詣する所也。内に小き長き山あり。八塩の岡と云。」とある。

**二四**二本の杉　『古今集』の「初瀬川ふる川の辺に二本(ふたもと)ある杉年を経てまたもあひ見む二本ある杉」（巻十九雑体・読人不知）と詠まれたところ。古い参道沿いにあたる。本堂の正面から登る現在の登廊の東側の谷あいにいまも残る。

**二五**多武峰　多武峯寺。多武峯の御破裂山南にあった。藤原鎌足の子定慧和尚が、父の墓を摂津国阿威山から移して寺としたもの。かつては妙楽寺と称した。明治の神仏分離令により廃寺、今は談山神社として残る。

廿九日ふくろふの声近く聞えけるはいまた夜[1]もふかきにやと思ひつゝおき出てけれは。早(はや)明行あけぼのゝ色も外のには似ず。物あさやかにて[2]彼[一]東波先生か[二]草木[3]かすへつへしと云ける山もかくやと見えて空もなをさへかへりけり

[三]寒かへり猶春風はふくろうの声もかすまぬ明ほのゝやま

あしたのほど社頭に参けれは荘厳巍々[4]として感涙をさへがたし

[四]我身世をすてゝもあふく峯の寺たかきも老のなみたかす〳〵

[五]松杉戢々（タリ）晩霞（ノ）間　鳥語鯨声寺更（ニ）閑（ナリ）

武（ハ）是（レ）元来止（レルノ）戈事　談鋒可（レシ）淬（ク）此談山

坊に帰[六]あしたのいとなみなとして。[七]ねつきと云社に参りゆき[5][八]ゝの岡の観音にまいれり。[九]卅三所のうちにて誠に人のゆきゝもしげくみえたり。[一〇]橘寺にて太子の尊容をかみ奉れり。あまたの内にすぐれさせおはしましけり。橘の木ありその実さへ残りてかうばし。山を[6][一一]仏頂山と号して[7]名碑あり。その文仏頂山の三字あざやかなり。今もつねに此山に[一二]は花降ぬるよし申けり。折しも堂[8]前[9]さくら盛なり花の下にてをの〳〵酒のみけり

[一三]法の花空にふらせし天つ風さくらかうへは今こゝろせよ

[一四]古寺の名にたちはなやその葉さへ実さへ花には桜さへ咲

これより[一五]あすか川を渡り[一六]安部の文殊堂に参りけり。[一七]岩屋あり[10]奥物ふかし。[一八]耳なしの[11]山かけうち過。[一九]そか川うち渡りけるに板橋はるかにみえたり

[二〇]うちわたし行〳〵とへはそか川のそがひに見へてかすむ板はし

程なく[二一]いはれ野にいたりぬ。[二二]萩なと[12]あるよしきけど今は道もなき野辺なり。おもひめくらすに蘇我と書て[13]はいはれとよめるにやとおぼえし[14]。

しる[二三]べせむ真萩やいづれいはれのゝいはれをとはんふる枝たにな
し。

かくてこよひは泊瀬本[15][二四]の寺にとまりぬ。[16]

卅日此寺を立出ぬるに曲河[二五]マカリカハとて[17]わかき人送りに馬なと引せて来り。
酒すゝめなどして[18]立わかれけり衣更着もけふのみなるに桃花こゝかし
こ咲て。河のまかり曲水[二六]の興をもよほすへき所のさまなるよし申て
盃[二七]に千とせもめくれ桃のはな川はまかりの水にうかへて。
暮て室[19][二八]といふ所につきぬ。

〔校異〕 1〈類〉ナシ。 2て〈類〉して。 3かすへ〈類〉かそへ。 4たかき〈類〉たけき、「け」に「かイ」の傍書アリ。 5ゆきゝ〈類〉往来、「逝向イ」の傍書アリ。 6仏頂山〈神〉「頂」に「頭软」の傍書アリ。 7名碑〈類〉石碑。 8〈東〉のアリ。 9〈類〉のアリ。 10〈類〉てアリ。 11〈類〉のアリ。 12〈東〉のアリ。 13は〈東〉ナシ。 14〈類〉侍りアリ。 15泊瀬本の寺〈類〉高田泊瀬の寺。 16〈類〉「この寺の俗又山世とて心やさしき人あり旧識のことく心をはこひこゝかしこ道しるへ 有かたき心さしにて有ける」とアリ。 17とて〈類〉まて。 18などして〈類〉て。 19室〈類〉むろへ、「へ」に「イ無」の傍書アリ。

〔語釈〕

一東波先生　東坡。宋の詩人蘇軾（一〇三六—一一〇一）のこと。四川省の人で、唐宋八大家の一人。字は子瞻（しせん）、東坡は号である。父の洵（じゅん）、弟の轍（てつ）とともに文名が高い。公条は、年少のころから蘇東坡の詩に親しんでいた。『実隆公記』永正二年（一五〇五）七月十九日の記事に、「公条朝臣東坡詩第一予教之了」とある。

二草木かすへつへしと云ける山　蘇軾の漢詩の一節を引くか。蘇軾の詩に盧山を詠むものが多く、あるいは盧山のことか。

三寒かへり猶春風はふくろうの声もかすまぬ明ほのゝやま　空は澄み渡り、あけぼのの色もことのほか鮮かで春風が吹いて、梟の声も澄みきって聞こえてくるあけぼのの山であるよ。（「春風が吹く」と「ふくろう」とを掛ける。）

四我身世をすてゝもあふく峯の寺たかきも老のなみたかす〳〵　出家をし、世を捨てている我が身にありながらも、振り仰いで見る多武峯の寺よ、その崇高な様に老の涙がしきりにそそられる。

五松杉戢々タリ晩霞ノ間　鳥語鯨声寺更ニ閑ナリ　武ハ是レ元来止ルノ戈事　談鋒可シ淬ク此談山　松や杉の木々が夕霞の中におさまり、鳥の声や鐘の音が聞こえ来て寺はひっそりとしている、多武峯の武はこれ、元来戈（ほこ）をおさめること、談鋒をこの談山において諫めるべきである。（「戢」は、音シュウ。おさめるの意。「晩霞」は、夕がすみ。「鯨声」は、鐘の音。「止戈」は、「武」の字形からいう。「談鋒」は、言論の勢いの鋭いこと。「談鋒」と「談峯」とを掛ける。「談山」とも「談峯」ともいうのは、中大兄皇子と藤原鎌足とが大化の改新の謀を談じ合った所との伝えによるもので、『多武峯縁起』に「其談処号曰談岑。後用多武二字耳。」とある。）

六あしたのいとなみ　朝のおつとめ、勤行。

七ねつきと云社　「ねつき」は念誦窟。多武峯の奥院にあたる地

で、多武峯中興の増賀上人の墓がある。増賀は平安時代中期の天台宗の僧。

**八**ゆきゝの岡の観音　高市郡明日香村岡の、岡寺の観音。岡寺は、八世紀の初めに、僧義淵が草壁皇子の宮地を寺としたもの。本尊は如意輪観音坐像。厄除観音として信仰をあつめている。「ゆきゝの岡」は歌枕。『万葉集』に「飛鳥川逝廻丘の秋萩は今日降る雨に散りか過ぎなむ」（巻八、一五五七）とある。逝回岳・逝廻岳・逝廻岳とも表記する歌があって、ユキタム丘・ユキミル丘などと読む説がある。所在について諸説があるが、契沖の『萬葉代匠記』には「逝回岳(ユキヽノヲカ)ハ今岡寺アル所トソ」とあり、『大日本地名辞書』（吉田東伍）は「岡の里の高処の名なり」と説く。

**九**卅三所　近畿地方に散在する三十三の観音の霊場を、西国三十三か所の札所という。観音が三十三に化身して衆生を救うとの信仰からきたもので、札所の巡礼は室町時代から普及した。一番の札所である青岸渡寺（和歌山県東牟婁郡那智勝浦町）にはじまり、三十三番札所の華厳寺（岐阜県揖斐郡谷汲村）に終わる。岡寺は、七番にあたる。

**一〇**橘寺　高市郡明日香村橘。聖徳太子誕生の地と伝える。『上宮聖徳法王帝説』に、「太子起七寺。四天王寺。法隆寺。中宮寺。橘寺。蜂丘寺。池後寺。葛木寺。」とあり、太子の創建になる七寺の一である。仏頭山上宮皇院菩提寺と称する。「橘」の名の起こりは、垂仁天皇の命によって田道間守が常世国から持ち帰った橘（非時香果(ときじくのかくのこのみ)）を植えたとの伝説に基づく。

**一一**仏頂山　橘寺後方にある仏頭山。



**一二**花降りぬるよし　聖徳太子が『勝鬘経』を講じた時に、蓮華が降りしきったという故事による。『聖徳太子伝暦』推古天皇十四年秋七月の条に「講竟之夜。蓮花夜零。花長二三尺。而溢方三四丈之地。明旦奏之。天皇太奇。車駕而覧之。即於其地。誓立寺堂。是今橘寺也。」（続群書類従）とあり、『法隆寺東院縁起』にも同様の記事がみえる。

**一三**法の花空にふらせし天つ風さくらかうへは今こゝろせよ　聖徳太子が勝鬘経を講じた時に法の花を空に降らせた天つ風よ、今咲き盛っている桜の花にむかっては心して吹け。

**一四**古寺の名にたちはなやその葉さへ実さへ花には桜さへ咲　古来名高い橘寺の橘の木よ、その木の葉にも実にも、今は桜の花が一杯に咲いていることよ。（「名にたち」と「たちばな」とを掛ける。）

**一五**あすか川　飛鳥川。高市郡の竜門や高取の山中に発して、稲淵山の麓を廻り、藤原宮址の西を経て大和川に注ぐ川。歌枕。飛鳥人に親しまれ、『万葉集』にも多く詠まれている。

**一六**安部の文殊堂　桜井市阿部。安倍倉梯麻呂の開基と伝える安倍の文殊院。本尊文殊菩薩は、天の橋立切戸(きれど)の文殊・山形県亀岡の文殊と並んで、日本三文殊の一つとして信仰されている。

**一七**岩屋　文殊院の境内東に閼伽井古墳、西には西古墳がある。いずれも横穴式石室をもち、内に石仏を祭る。

**一八**耳なしの山　耳成山。大和三山の一つ。歌枕。橿原市の北部に位置し、平地の中に円錐形の山容を呈している。標高一三九メートル。

**一九**そか川　曽我川。御所市重坂から北流し、橿原市曽我の地で檜

限川を合わせ、さらに広瀬川に合流してのち大和川に注ぐ。歌枕。曽我の地名は、蘇我氏の祖先がここに居住したとの伝承による。

**二〇**うちわたし行〳〵とへはそか川のそがひに見へてかすむ板はし　曽我川を渡りながら尋ねてみると、川のうしろの方向に板橋がかすんで見える。（「そが川」の「そが」から「そがひ」をひく。）

**二一**いはれ野　曽我川の東岸、橿原市中曽司町の磐余神社がある辺りをいうか。歌枕。磐余神社は、神倭磐余比古命（神武天皇）をまつる。

**二二**萩なとあるよし　「いはれ野」が古来、萩の名所として知られ、古歌にも多く詠まれていることをいう。「いはれ野の萩の朝露わけゆけば恋せし袖の心地こそすれ」（『後拾遺集』巻四秋上・素意法師）、「いはれ野や萩のふるえにさく花をしたきそたてるおもしろの駒」（顕仲）などの歌がある。

**二三**しるべせむ真萩やいづれいはれのゝいはれをとはんふる枝たになし　古歌に詠まれているこの地を示してくれる萩はどこにあるのだろうか、いはれ野のいわれを問おうにも萩の古枝さえも見あたらないことよ。

**二四**泊瀬本の寺　大和高田市南本町の長谷本寺。大満の開山になる真言宗の寺で、本尊は十一面観音。今は県道になっているが、もと寺院の東側を流れていた高田川の橋のたもとにあったところから、別名を橋本寺とも称する。ハシモトが訛ってハセモトになったものかとも考えられている。

**二五**曲河　橿原市曲川（まがりかわ）町。まわりかわ・まりかわとも称し、曽我川の曲流部西側に位置する。『古事記』安閑天皇条に、「勾の金箸宮に坐しまして、天の下治めたまひき」、『日本書紀』安閑天皇元年正月条に「都を大倭国の勾（まがり）金橋に遷す。因りて宮号とす」とあり、勾金橋宮（まがりのかなはしのみや）伝承の地。

**二六**曲水　曲水の宴。庭苑や郊外の水辺に臨んで、流水に酒杯を浮かべ、杯が自分の前に流れつくまでに詩歌を詠む催し。朝廷においては、三月三日の桃の節句に行われた。

**二七**盃に千とせもめくれ桃のはな川はまかりの水にうかへて　曲水の宴の盃とともに幾千年もめぐりめぐってほしい、桃の花よ、曲河のまがりの水に浮かび流れて。（時あたかも春、「曲河」との地の名に興を覚えての座興。）

**二八**室　御所市室。葛城川の東岸。旧室村の地。孝安天皇の室の秋津宮伝承の地で、「室の大墓」と呼ばれる宮山古墳がある。

三月一日けふはをの〳〵こゝにて足をやすめけり。[一]十五首の当座あり。[1]此室のあるし[二]文道に心さしふかく[2]歌の道にも心かけたる人なり。さやうの物語などしてくれぬ。[3]あけばこれより芳野におもむくへきよし申けり。[三]廿五日の[4]道中にて両吟事終りぬ。芳野ゝ花いまた盛ならさる由申せしかは。[5][四]高野山へ[6]参るへきの[7]由[8]にて。道の事なと申つかはせり。[9]暁かた[五]逍遙院夢にみえ給へり。

二日とまりを立出て。[10][六]とたて山[七]まつちたうげ[11][八]桜井の水を過て高野山にのほりぬ。[九]かふろざか[一〇]不動坂なと。闇しよりもさかし。[12]此あたりは乗物も叶はされば[13]からくしてのほりつきぬ。ひそかに宿りに付て[14]

けり。伴ひし宗見といへるも旅のよそほひ[15]をろそかにし[16]あしもとも
たへかたきよし申てともなはさりけり。彼宗二[17]奈良にての家あるし
など伴ふへきよし申てきけり。

〔校異〕 1室〈類〉むろへ。「へ」に「イ無」の傍書アリ。2〈類〉てアリ。3あけば〈類〉明ぬれば。4道中にて両吟事〈類〉両吟道中にて。5〈類〉先アリ。6へ〈類〉に。7の〈類〉ナシ。8にて〈類〉中て。9り〈類〉る。10立出て〈類〉出たちて。11〈類〉をこえアリ。12〈類〉くアリ。13からくして〈類〉かろうして。14て〈類〉ナシ。15よそほひ〈類〉よそひ。16〈類〉てアリ。17〈類〉又アリ。

〔語釈〕

**一** 十五首の当座　前もって歌題を決めて歌を詠む兼題の歌会に対し、歌会の場において歌題を決め、その場で歌を詠むのが当座（即題）の歌会である。ここでは、出席者がそれぞれ十五首ずつ当座の歌を詠んだ。前右大臣であり、都の古典学者・文化人を代表する公条を迎え、室のあるじや近隣の豪族たちが出席したと考えられる。

**二** 文道　文学の道。学芸のみち。

**三** 廿五日の道中にて両吟事終りぬ　奈良において二月二十五日から始めた、公条と紹巴との両吟百韻連歌が終わった。

**四** 高野山　和歌山県伊都郡にあり、標高約九〇〇メートル。弘法大師の開山になる真言宗の総本山金剛峯寺がある。中世以降ここを菩提所とする風が盛んになった。

**五** 逍遙院　公条の父親である三条西実隆の院号。実隆は、大永四年（一五二四）四月、連歌師周桂を伴って高野山に詣でている。（『高野参詣日記』）。天文六年（一五三七）十月三日、八十三歳で没した。このたびの公条の旅は、父実隆の旅行の影響が大きいと思われる。



**六** とたて山　所在未詳。『南遊紀行』（貝原益軒）に、「堤のごとく長くひきゝ山也。まことに戸をたてまはしたるごとくにみゆ。名所なり。名寄には大和国宇智郡とあり。里人は猶紀州の内也と云。」とある。

**七** まつちたうげ　真土峠。大和と紀伊との国境をなす。『万葉集』には、亦打・又打・信土などとも表記する。和歌山県橋本市隅田町真土にその名を残す。麓を真土川（落合川）が流れ、「あさもよし紀人ともしも真土山行き来と見らむ紀人ともしも」（『万葉集』巻一、五五）。

**八** 桜井の水　所在未詳。五條市須恵にある桜井寺付近にあった泉かとも考えられるが、桜井寺には遺跡なく、道順から言っても不審。

**九** かふろざか　紀ノ川の南岸に、橋本市学文路（かむろ）がある。橋本で紀ノ川を渡り、河根峠（九度山町）を越えて高野山の不動坂・女人堂に至る道は、高野参詣の表参道であった。かふろ坂は、旧学文路（かむろ）村内の坂。

**一〇** 不動坂　神谷（かみや）（高野町）から女人堂に至る間の坂。ケーブルカーで山上に至るようになるまでは、神谷から不動坂を経て女人堂に登る道を通った。この坂は、登山者の腰を捧で押しあげる「腰押」と称する職業があったほどの急坂であった。

**一一** 宗二　既出。二月二十五日の注一六参照。

三日けふは逍遙院[1]忌日にあたれる[2]。うれしくてかゆこはいひなとも

とりあへす朝霧を払ひて奥の院[二]にまいれり。節句[3][三]のしるしにや[4]衆徒袖をつらね道もせきあへずそ有ける。参りて拝み奉るに白き犬[四]ゐ垣のあたりに臥たり。利生[五]のよし人々申けり。よろこひなから御前を立て灯[六]籠堂に参り大師[七]の念珠五鈷なと頂戴し。大塔諸堂[八]結縁してやとりに帰れり。此十[九]とせばかりに成ぬるにや。参詣せし事おもひいてゝ一[一〇]度参詣高野山。無数ノ罪障道中ニ滅の記文も有かたきに二度までの参詣二仏[5]縁あさからす

横嶺[一一]縦峯不レ耐レ登ルニ　友人携ヘレ手ヲ又支レフ藤ヲ

再来尤喜桃‐花ノ節　前度ノ劉‐郎一‐箇ノ僧

たらちね[一二]もまたたらちめのはゝ子草つみうしなはんけふこゝにきて

をの〳〵旅のよそひして下山す。昨日も山中野火所[一三]〳〵みえし。けふは又大なる木やけておれかゝり[6]たる中よりほのほあがれり。右はやま左はふかき谷あしもとにも火もえ[7]ける。木の下を通れるまことに避雨[一四]の陵をすくる心地[8]もかくとみえたり。くたりつゝ見れは麓なるかね川[一五]きのふは渡りしに。けふは橋打わたりてきつきけり。水‐村山‐郭酒旗ノ[一六]風のすかた。杏‐艶桃‐嬌奪ニフ晩霞ヲ[一七]そらのうらゝかさも心地よけなり。節日の盃よび出して各いはひけり此行さき清水[一八]と云川は吉野川の末なればいつしかこのころは花のおもかけもうかひていそきわたりたり。日暮ぬれは絵堂[一九]にとまり後夜[二〇]の念仏など聴聞してあかしけり。

〔校異〕　1〈類〉「天文六十三」の傍書アリ。2る〈類〉り。3節句〈類〉節日。4にや〈東〉かや。5二仏縁〈類〉宿縁。「宿」に「仏イ」の傍書アリ。6かゝり〈類〉かへり。7も〈神〉ナシ。8心地もかくとみえたり〈東〉心地す。

〔語釈〕

**一**逍遙院忌日　天文六年（一五三七）十月三日、実隆没。

**二**奥の院　寺院の奥の方にあって、秘仏や開山・祖師などの像を祭る堂。高野山蓮華谷の奥の院には、弘法大師をまつる御廟がある。

**三**節句　季節の節目の日。節日・節供とも。人日（正月七日）、上巳（三月三日）、端午（五月五日）、七夕（七月七日）、重陽（九月九日）をいう。ここは三月三日の節句。

**四**白き犬　弘法大師が大和国宇智郡（五條市）で「南山の犬飼」（猟師）にあい、その案内で高野山に入ったという開創縁起をふまえている。弘法大師が出会ったのは、実は高野明神で、白黒二匹の犬を連れていたという。『高野春秋編年輯録』に「勧発信心集云。和尚帰朝以往漸厭ニ世塵一。竊尋ニ禅窟一。弘仁七年孟夏之比。経ニ歴和州宇智郡一。逢ニ一人猟者一。形色深赤。身長八尺許。骨高筋太。着ニ小袖青衣一。帯ニ弓箭一。随ニ従黒白二犬一。而遇ニ和尚于道一。互相成ニ不審一。踟蹰。和尚先訊ニ子細一。猟者曰。我是南山之犬飼也。」とある。『高野大師御広伝』『金剛峰寺建立修行縁起』には大小二匹の黒犬とあり、『今昔物語』にも二匹の黒犬に出会ったとの話になっている。今、五條市犬飼町に犬飼山転法輪寺があり、弘法大師と高野明神との出会いの地と伝えている。

**五**利生　Rixǒ 神（Camis）や仏（Fotoques）の褒賞、加護、利益など（『日葡辞書』）。

**六**灯籠堂　高野山の奥の院の弘法大師廟拝殿。弘法大師の高弟真然の創建と伝えられ、後に藤原道長によって整備された。実隆の『高野参詣日記』大永四年（一五二四）四月二十四日の記事に「燈明その数なくひかりかゝやきてえもいはず」とあり、現在も常夜燈が奉納されている。

**七**大師の念珠五鈷　弘法大師所持伝承の数珠と五鈷。五鈷は、密教の法具の一。もとはインドの護身用の武器であった。両端にある爪の数によって、独鈷・三鈷・五鈷と称する。五鈷は、両端にそれぞれ五本の爪があり、五鈷杵（ごこしょう）ともいう。前項引用の『高野参詣日記』の記事に続いて「大師御所持の鈴鈷、水精の御念珠など頂戴せさせられ侍りき」とある。

**八**大塔　高野山上の根本大塔。真言密教の根本を表わすものとして、真然のときに完成したと伝える。天保十四年（一八四三）焼失し、昭和十二年（一九三七）に再建。現在の塔は、高さ約五十メートル。

**九**此十とせばかりに成ぬるにや。参詣せし事おもひいてゝ　この記述から、十年程前に高野山に参っていることがわかる。

**一〇**一度参詣高野山。無数ノ罪障道中ニ滅　高野山参詣の功徳を唱道する文。弘法大師入定留身の地である高野山は、十世紀初め頃から霊場として盛んに信仰を集めた。

**一一**横嶺縦峯不レ耐レ登ルニ　友人携ヘ手ヲ又支レフ藤ヲ　再来尤喜桃花ノ節　前度ノ劉郎一箇ノ僧　高野山の嶺々が縦横に続いていて登るに耐えない、友人と手を繋ぎ、また藤のつるを引っ張りながら歩みを進める、



再びやって来た今日が丁度桃の節句の日であるのは喜ばしい、前回は劉郎のようにやって来た自分は、今は一人の僧である。（「劉郎」は、黄庭堅の詩「戯簡ニ朱公武劉邦直田子平一詩」に、「劉郎好ミ詩又能レ文、方ニ我奔竄一義甚敦」とある。）

**一二**たらちねもまたたらちめのはゝ子草つみうしなはんけふこゝにきて　父も、また母も罪が消えるであろう、子どもの私が、ここ高野山にお参りすることによって。（「たらちね」・「たらちめ」は、「はゝ子」の縁語。「はゝ子草つみ」と「罪」を掛ける。「はゝ子草」は、春の七草の一。ごぎょう。三月三日に、米の粉に「ははこ草」を混えて搗き、ははこ餅をつくる。）

**一三**野火　春のはじめごろ、野山の枯草を焼く火。

**一四**避雨の陵　未詳。『春秋左氏伝』（僖公・三十二年条）に「殽有ニ二陵一焉。其南陵、夏后皐之墓也。其北陵、文王之所レ避ニ風雨一也。」の一文がある。

**一五**かね川　和歌山県伊都郡九度山町河根（かね）の地を流れる川。近世に至ると、橋本から学文路（橋本市）・河根・神谷（高野町）を経て、不動坂から女人堂に登る不動坂口が高野山に参詣する表参道となった。

**一六**水村山郭酒旗ノ風　杜牧の詩「江南ノ春」に、「千里鶯啼キテ緑映ズレ紅ニ　水村山郭酒旗ノ風　南朝四百八十寺　多少ノ楼台煙雨ノ中」とある。杜牧（八〇三―八五二）は、晩唐の詩人。字は牧之、号は樊川。陝西省の人。

**一七**杏艶桃嬌奪ニフ晩霞一ヲ　唐彦謙の詩「曲江春望詩」に、「杏艶桃

嬌奪二晩霞一 楽遊無レ廟有二年華一」の句がある。唐彦謙は唐の人で、字は茂業。鹿門先生、また陶穀とも号する。技芸に通じ、詩を善くした。

**一八**清水　橋本市清水。『親長卿記』文明十一年（一四七九）三月十九日の記事に「詣高野、午剋許於石瀬昼駄向(餉)、晩頭着清水宿」、翌二十日の記事に「立清水宿、未剋許着高野山」とみえる。「清水と云川」は「吉野川の末なれば」とあるところから、吉野川の下流をいうか。

**一九**絵堂　所在未詳。

**二〇**後夜の念仏　後夜のおつとめ。後夜は、夜半から朝までの間。昼夜を晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜の六つに分ける。

四日高[一]天寺にいたりぬ。初[二]陽毎朝来の梅の樹ちかき比[1]風におれたるよし申て。一丈はかりの数囲故朽[2]したる傍に小枝有
[三]くちてたに梅もたかまのはなの色に八雲をみね[3]にのこすうくひす桜花[4]今さかりなり
[四]来てみれは山のかひよりみし雲のうへにたかまのはなはさきけり
是よりうへは乗物はかな[5]はざる[6]よし申せしかは。誠に山臥のすがたに[五]てかつらきの嶺金剛山へと心さしけり。道すから[7]のけはしき。鳥の音もたへたり[8]。所々[9]雪残れり[10]み山しきみ[11]など冬のうち[12]の盛の姿にてのこ[13]れるは誠に鳥のかよひもなき故と人〳〵申せり。晡時[14][六]にから[15]くして上りつきぬ。[七]ほたと云物たきす[16]さみたる炉火のもとによりて。道すからのさむさつくろふ。ほどもなく[八]点心など云物とりまかなへる[17]。かく[18]道たへたる山の上に。かゝるたくはへのとりあへさりしもふしきにて思ひつゝけける[19]

[九]衆峯絶頂金剛ノ窟　行者高蹤路転タ迷フ
今日初嘗ム禪[一〇]悦ノ食　相監[20]法喜法身ノ妻

かくて法喜菩薩役[一一]ノ行者おかみ奉り。[一二]かつらきの神橋[21]わたし給ひし所なと拝みて

[一三]末とけぬおもひはかけし岩はしもかくこそありけれかつらきの神　紹巴
[一四]春の日もに[22]しに成らしかつらきや[23]はなにとよらの鐘ひゝくそら[24]
やかて下山すべきとて麓まて迎の馬などこ[25]ひてまたせけるに。道をふみちがへ[一五]木くだしの道とて猶けはしき方にくだりける程に。迎[26]乗物からうしてくるゝほどに行あひて又室[一六]へそ帰りける。

〔校異〕 1〈類〉のアリ。2故朽〈類〉枯朽。3みね〈類〉声。4〈類〉ありアリ。5は〈類〉〈東〉ナシ。6ざる〈東〉す。7〈類〉「この山の名たかき於南海中有一浄土常在説法法喜菩薩名金剛山の名文もこの世の外の心ちして」アリ。8たり〈類〉たる。9所々〈類〉所に。10残れり〈類〉のこり。11み山しきみ〈類〉み山木、「木」に「しきみイ」の傍書アリ。〈東〉みやましきひ。12うちの〈類〉ナシ。13のこれるは〈類〉たてる。14晡時〈東〉「サルノトキ」の傍書アリ。15からく〈類〉からう。16すさみ〈類〉〈東〉すさひ。17まかなへる〈類〉まかなへ備へたり。〈東〉まかなひて。18かく〈類〉なかく。19ける〈神〉る。20監〈類〉盟。21橋〈類〉岩橋。22にしに成らし〈類〉はやにしなるや。23や〈類〉の。24そら〈類〉なり。25こひて〈類〉よひて。26迎乗物〈類〉むかへの乗物。〈東〉むかひ乗物。

〔語釈〕

**一**高天寺　御所市高天。行基開創と伝える寺。葛城氏の祖神を祀る高天彦神社の北東に橋本院があり、高天寺の跡という。「〔寛文記〕に曰く、高天寺は金剛山の麓にして、草庵五六坊あり。いにしへは伽藍巍々たりしが、何の代よりか頽廃して、僅に三間四面の堂に十一面観世音并に釈尊の霊像を安置す。其側に遍照院といふ草庵の庭前に、孝謙天皇の御宇に鶯やどりて和歌を詠じたる梅の木今にあり。」（『大和名所図会』）。

**二**初陽毎朝来の梅の樹　『古今集』仮名序の「花に鳴く鶯、水にすむ蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」に関して、多くの古今注があげる有名な説話に基づく。例えば『古今和歌集序聞書三流抄』には、「日本紀云、孝謙天皇ノ御時、大和国天間寺ニ僧有。彼僧ニ最愛ノ弟子アリ。彼ノ弟子死テ後、師深ク歎キケレドモ、月日ヲ経テ後忘レヌ。或年ノ春、住ケル家ノ前ナル梅ノ木ニ鶯来テ鳴。其声ヲ聞バ、『初陽毎朝来、不相還本栖』ト啼ク、是ヲ見レバ哥ナリ。（ハツハルノアシタゴトニハキタレドモアハデゾカヘルモトノスミカニ）此時、師、弟子ノ鶯ト成タリケルト知テ深クトブラヒケリ。此哥、万葉集ニ鶯ノ哥ト入レリ。」（『中世古今集注釈書解題二』参照。）なお、この説話は『曽我物語』・謡曲『白楽天』などにも引かれている。

**三**くちてたに梅もたかまのはなの色に八雲をみねにのこすうくひす
枯れ朽ちてさえも梅は高い名を残している、雲のたなびくこの高天の嶺に、今、桜が花ざかりで、和歌の伝統を伝える鶯の声が聞こえてくる。（八雲は、『古事記』の「八雲立つ出雲八重垣」の歌を和歌の始めと伝えるところから、和歌の道をいう。ここは、注二の説話をふまえている。）



**四**来てみれは山のかひよりみし雲のうへにたかまのはなはさきけり
高天寺のあたりまで登ってきて見ると、山あいにみえた雲の上に、葛城山の桜の花が咲き盛っているよ。（「たかま」の山は、葛城山の別称で桜の名所。「かつらぎやたかまの山のさくら花雲井のよそに見てや過ぎなん」（『千載集』巻一春上・藤原顕輔）など。「山のかひ」は、山と山との間の狭い所。「桜花さきにけらしなあしひきの山のかひより見ゆる白雲」（『古今集』巻一春上・紀貫之）をふまえる。従来の高天の桜の花は麓から見ている詠が多いのに対して、公条は、ここまで登ったという感慨を表現した。）

**五**かつらきの嶺金剛山　かつらきの嶺は、北葛城郡から御所市・五條市に連なる山。大和と河内の国境をなす。歌枕。金剛山はその主峰で、高さ一一二五メートル。古名を葛城山とも、高天（間）山とも称した。山頂には、役小角の創建と伝える金剛山転法輪寺がある。

**六**晡時　餔時とも。申の刻、現在の午後四時から六時ごろ。転じて、日暮れ時をもいう。

**七**ほた　燃料にする木の切れはし。そだ、ほだとも。「こりつみしほたなかりせは冬ふかきかた山ほらにいかにすまゝし」（『永久百首』冬、薪・源忠房）とある。

**八**点心　Tenjin　正式の食事の接待のあとで出される中間食のよう

な食物（『日葡辞書』）。禅家では、定められた食事の前後にとる少量の食物をいう。

**九**衆峯絶頂金剛ノ窟　行者高蹤路転タ迷フ　今日初嘗ム禅悦ノ食　相監法喜法身ノ妻　多くの峯々の絶頂にある金剛の窟。ここは役行者が飛びまわって修行した所であり、自分は今迷いながらにようようやって来た。今日、はじめて禅悦の食事をしたことだ。その喜びは、法体となった私にとっては亡き妻に逢うことができたようなものだ。（「金剛窟」は、金剛山上にあって岩屋文殊をまつる岩屋のことか。「禅悦食」は、法悦という食物。禅定に入れば心が静まり、快適になるので、その状態を食とすること（中村元『仏教語大辞典』）。「法身」は、法体となった身。）

**一〇**法喜菩薩　金剛山転法輪寺の本尊。役行者の作と伝え、法起・宝基とも記す。「海中有レ処、名二金剛山一、従レ昔已来、諸菩薩衆、於レ中止住、現有二菩薩一、名曰二法起一」（『華厳経』諸菩薩住処品第卅二）、また『葛城修行灌頂式』に「於二金剛山一法起菩薩現二地獄極楽一。七日七夜引導ス。示ニ鷲峯檀特ノ行相一。倩案。是レハ法起菩薩ノ浄土。常在説法ノ霊山也。」（『日本大蔵経修験道章疏二』）とあり、金剛山にも他界があると信じられていた。

**一一**役ノ行者　金剛山転法輪寺役行者堂に役行者の像がまつられている。役行者は、役小角・役優婆塞とも。修験道の開祖で、葛城郡茅原の生まれ。仏教を好み、呪術を善くしたという。葛城山・吉野の金峰山・大峰山などで苦業を積んだが、文武天皇の三年に、世間を惑わせる妖言をなしたとの罪で伊豆に流され（『続日本紀』文武天皇三年



（六九九）五月条）、大宝元年（七〇一）に赦されている。一言主神（ひとことぬしのかみ）との交渉が『日本霊異記』・『三宝絵詞』・『今昔物語』などにみえる。

**一二**かつらきの神橋わたし給ひし所　「かつらぎの神」は、葛城山の山神。一言主神。『日本霊異記』などに広くみえる説話に、昔役行者の命令で葛城山と吉野の金峰山との間に岩橋を架けることになった一言主神が、容貌の醜いのを恥じて夜間だけ仕事をしたために橋は完成しなかったという話がある。「橋わたし給ひし所」は、金剛山上の一等三角点のある山の南斜面と伝えられている（金剛山葛木神社宮司葛城貢氏教示）。

**一三**末とけぬおもひはかけし岩はしもかくこそありけれかつらきの神　添いとげられない思いは掛けるまい、昔役行者の命によって葛城の山と金峰山との間に葛城の神が架けようとした岩橋のように。（「思ひはかけじ」と「架けし」とを掛ける。注**一二**の説話を指す。「いはばしのよるの契もたえぬべしあくるわびしき葛城の神」（『拾遺集』巻一八雑賀・春宮女蔵人左近）などとあるように、「かつらぎの神」は、恋愛や物事の成就しないことの例えにしばしば用いられる。）

**一四**春の日もにしに成らしかつらきやはなにとよらの鐘ひゝくそら　春の日も西に傾くようだ、葛城の山に咲く桜の花に豊浦寺のいりあいの鐘の音が響く空よ。（「とよら」は、豊浦寺。高市郡明日香村にあり、推古天皇の皇居であった豊浦宮のあとに建てたと伝える寺。『催馬楽』に、「葛城の　寺の前なるや　豊浦（とよら）の寺の　西なるや」とある。）

**一五**木くだしの道　木だしの道。木材を運び出すための道。

**一六**室　二月二十九日に泊った宿。同日の注**二八**参照。

五日吉野におもむきけり。これより[1]は宗見[2]と伴ひけり。[一]むつたの淀はしの有けるか中絶て。修理せし折ふしにてけふは舟にてわたりぬ。大なる木をつくりこめたる旅店あり。あるしの云やう此木は[二]いはれある木なるよし申せしかはむつたのよとの柳にてはなきかと申かけければ。その事にてあるよし申みれはまたあまた柳ともいまたさむくてめもはらさる木ともなり。爰にて人々[3][三]水あびなとしけり

[四]宿いてゝいつゝの貝をふくからにこゝはむつたのかすむ青柳

行〳〵て芳野に[4]いたりぬれは。[五]せきやの花はちりて所々残り。ちり落る花を谷風の吹あげたる世はなれたる様なり。[六]こもりか[七]つての両社に参り。[八]かねの鳥井目おとろかれたり。[九]鳥形の額あり字形わきまへかたし。人に問ければ[5]法(発ノ字カ)心門とぞ申ける入もて行まゝに一里ばかりは今を盛なる花の木どもかずもしらす。おもひやりしにも[6]聞しにも越たる[7]観とそおほえし。[一〇]愛染宝塔までのぼりてみれは。此あたりはいまた梢とも咲あへさりしかは。又盛の[8]花のもとに帰りて酒すゝめ酔の心ちに[9]はいよ〳〵花も色をましたり。いかなる歌もよみぬへきよしかねておもひしも中〳〵ことさまし[10]けるやうにて[一一]歌心もうせ[11]終ぬ

[12][一二]さけは[13]ちりちれはさくらのかげ[14]ふかみよしのははなのときはやまかな

[一三]心たゝ花にちりつゝよくみんと思ふにたがふみよしのゝ山[15]

あたりをみれは[一四]立願にて花の木ともうへてまいらせけるよし申せしに。百本の内と札[16]をつけたる木[17]そのたけ二尺あまりなる木も[18]。今三とせ四とせのうちにはさかりの花の木たるへきよし思ひやりて

[一五]咲ちるはけふみつくしつこゝろ[19]のみわか木にのこすはなのみよし野[20]

[一六]もろこしのよし野か花におくもなし[21]　紹巴

[一七]おなしかざしのさくらいくもと

[22]かくて道すがら両吟百[23]句おはりぬ。かくて一夜を宿[24]にあかしけり。

〔校異〕 1は〈類〉ナシ。2と〈類〉も。3水あび〈類〉水あみ。4いたり〈類〉入。5法心門〈類〉発心門。6聞しにも〈神〉ナシ。7観〈類〉壮観。〈東〉「ミモノ」の傍書アリ。8花〈類〉木。9は〈類〉ナシ。10ける〈類〉たる。11終ぬ〈類〉はてぬ〈東〉終りぬ。12〈類〉この歌、作者を紹巴とし「心たゝ……」の歌のあとにアリ。13ちり〈東〉ちる。14ふかみ〈類〉ふかき。15〈類〉とありしかはアリ。「さけはちり……」の歌に続く。16を〈類〉ナシ。17木〈東〉ナシ。18も〈類〉とも。19のみ〈類〉なを。20〈類〉やとにかへりてアリ。21〈類〉とありしかはアリ。22かくて道すがら〈類〉ナシ。23百句〈類〉百韻。24宿に〈類〉ナシ。

〔語釈〕

一むつたの淀　吉野郡吉野町六田と大淀町北六田とをつなぐための六田の渡(わたし)があったあたり。この付近は吉野川の流れが緩やかで淀と呼ばれるにふさわしい。歌枕。『万葉集』に「昔に聞き目にはいまだ見ぬ吉野川六田の淀を今日見つるかも」(巻七、一一〇五)がある。柳の名所であったところから、柳の渡し・柳の宿(しゅく)ともいう。大正八年に

美吉野橋が架けられるまで、吉野山への往還の要衝であり、金峯詣の行者が渡津する所であった。

**二**いはれある木　六田の渡しは、柳の渡しとも称し、川岸には柳が多かった。ここは、『万葉集』の「河蝦（かはづ）鳴く六田の川の川楊（かはやぎ）のねもころ見れど飽かぬ川かも」（巻九、一七二三）、『新古今集』の「たかせさすむつたの淀の柳原緑も深く霞む春かな」（巻一春上・公経）などと詠まれた柳をさす。

**三**水あび　水あみ。水を浴びること。ここは、修験者の垢離の行にならって、身を潔めて吉野に向ったのをいう。

**四**宿いてゝいつゝの貝をふくからにこゝはむつたのかすむ青柳　宿を出た時は五つどきの貝を吹くのを聞いて出発したが、ここは六つだといい淀辺には青柳がかすんでいる。（「貝」は、法螺貝。時刻を知らせたり、種々の合図をするのに吹き鳴らし、僧侶や山伏の行（ぎょう）にも用いた。「いつつ」は、午前八時頃および午後八時頃。ここは午前八時頃。六つは、午前五時で、いつつとむつをからませて時間が逆になるところに面白さがある。「むつた（六田）」と「六つ」を掛ける。）

**五**せきやの花　関屋は、吉野山の黒門付近。黒門は金峯山寺の総門で、銅（かね）の鳥居への登り口にある黒色の門。近世までは大名もここまで来ると、槍を伏せ下乗せねば通れない関所であった。このあたりの桜を、関屋の花・関屋の桜と呼ぶ。

**六**こもり　子守明神。吉野町吉野山。吉野水分（みくまり）神社のこと。吉野八社明神の一。『金峯山秘密伝』などに子守明神を「女体神」とし「勝手大明神所ㇾ妻也」とあって「こもりかっての両社」を一対と見ている。

**七**かつて　勝手神社。吉野町吉野山。吉野山の登山路と如意輪寺への分岐点に位置する。天忍穂耳命・大山祇命・木花咲耶姫命ほか四神を祭る。中世には、蔵王権現とともに修験者の信仰が厚かった。

**八**かねの鳥井　吉野山の黒門から急坂を登った所に建つ鳥居。国指定の重要文化財。銅板で周りを固めた室町時代の明神様式の鳥居。高さ七・六メートル、柱の周り約三・三メートル。「発心門」とも呼び、この鳥居を第一番目の門として、山上ケ嶽までの道中に修行・等覚・妙覚の三門が続く。修験者はここで行をおこない、「吉野なる銅の鳥居に手をかけて弥陀の浄土に入るぞうれしき」との秘歌を唱えて修行の途についた。

**九**鳥形の額　銅の鳥居に掛かる額。修験者の第一の行場であるところから「発心門」と記す（写真参照）。「発心」は、「法心」とも。正平三年（一三四八）に高師直が来攻した時、鳥居とともに焼け落ちたが、その後、現在のものが掛けられた。

**一〇**愛染宝塔　吉野町吉野山。城山（高城山とも〔『和州旧跡幽考』〕）と呼ばれる山にあったといわれる。吉野水分神社の上方にあたり、多数の社寺堂宇が軒を連ねていて、御岳精進の行場として栄えた。

**一一**歌心もうせ終ぬ　花見の酒に酔い、桜の花の見事さに圧倒されて歌も詠めないことをいう。

**一二**さけはちりちれはさくらのかげふかみよしのははなのときはやまかな　咲くと散り、散るとまた咲く桜の花の花かげ深い吉野は、始終桜の咲いている山であるようだ。（「散れば咲く」と「さくら」を掛

ける。）

**一三**心たゝ花にちりつゝよくみんと思ふにたがふみよしのゝ山　心をただ花に遊ばせながら、よくよく賞美しようとのかねての思いとちがって、あまりの見事さに圧倒されるばかりであるよ、ここ美吉野の山は。

**一四**立願にて花の木ともうへて　「立願」は、神仏に願をかけて祈ること。吉野山の桜は蔵王権現の神木とされていて、古来、金峯山寺に参詣する人々が若木を寄進した。なお、『和州巡覧記』に、「里人の偏に桜を愛するにもあらず、蔵王権現の神木にて惜しみ給ふと云ひつたへて、神の祟を畏るゝ故なり」とある。

**一五**咲ちるはけふみつくしつこゝろのみわか木にのこすはなのみよし野　咲き散る桜の花は今日は十分に見た、あとは丈二尺ばかりの若桜が、三・四年後には立派に成長するであろうと心ひかれるよ、花の盛りの吉野で。

**一六**もろこしのよし野か花におくもなし　唐の国の山というほど遥かな吉野山の桜を、すっかり奥まで見ることができて心残りはない。（「唐土（もろこし）の吉野の山に籠るとも遅れむと思ふわれならなくに」［『古今集』巻一九雑体・藤原時平］をふまえる。）

**一七**おなしかざしのさくらいくもと　昔、同じかざしの桜と詠まれた花はいったい幾本あったであろうか。（「わがやどとたのむ吉野に君しいらばおなじかざしをさしこそはせめ」［『後撰集』巻一二恋四・伊勢］をふまえる。この伊勢の歌は、藤原時平の「ひたすらにいとひはてぬる物ならば吉野の山にゆくへしられじ」［『後撰集』巻一二恋四］の返歌であり、前句の「もろこしのよし野か花におくもなし」が同じ時平の歌をふまえているのをうけける。）

六日吉野をぞ[1]出ける。むったの川けふ[2]は橋をわたしけれは馬など迎に来りてたやすく渡りて。又高田泊瀬本[3][一]極楽寺につきぬ。

七日けふはしつかに打やすみて[二]廿首当座よみけり。

八日[三]たいま寺に参り開張し。[四]瑠璃壇[4]めくりなどしておがみ奉るに[5]。[五]浄土九品のさま物あざやかなり

[六]さほ姫のをれるころもは八重桜九しなには手やのこしけむ。

[七]染殿へ参る道に[八]あたの大野あり。馬にむち打て行けるに。萩なと生し[6]ぬへきさまもなし。[九]兎葵燕麦春風に動揺すべきさまなり

[一〇]あだなれやあたの大野をけふみれは麦はむ馬[7]のあとはかりして

染殿に参り[8]けるに。本尊も大仏なりし[9]も雨露にをかされ[一一]糸をそめ給へる池とても水も見えす。[一二]糸を懸ほし給ひし桜とて朽て残れり。花みなちりはてたる本にて酒なともたせてしはらく有て。[一三]片岡清水明王院に至りて夜を明しけり。

〔校異〕　1ぞ〈類〉ナシ。2は〈類〉ナシ。3本〈類〉寺。4〈類〉などアリ。5に〈類〉ナシ。6し〈類〉ナシ。7馬〈類〉鳥（馬イ）。8ける〈類〉てみ侍る。9しも〈類〉雪霜。

〔語釈〕

**一**極楽寺　高田泊瀬本寺の別名か。『匠材集』に「かくらく（泊瀬の枕詞也極楽とゆふ心也）」とあるがこれに関連あるか。泊瀬本寺は二月二十九日に既出。

**二**廿首当座　出席者がそれぞれ二十首ずつ当座（即題）の歌を詠む歌会。十五首の当座　三月一日に既出。

**三**たいま寺　当麻寺。北葛城郡当麻町当麻。二上山東麓。はじめ聖徳太子の弟麻呂子親王が二上山西麓に万蔵院禅林寺を建立、その子孫が現在地に移し、天武天皇十三年に当麻寺として伽藍が完成した。奈良時代、右大臣藤原豊成（七〇四—七六五）の息女中将姫が継母に追われ、この寺に入って蓮糸で当麻曼荼羅を織ったという伝承が有名。平安時代後期、浄土教の流行とともに、浄土の霊場として境内の西にある曼荼羅堂（永暦二年〈一一六一〉上棟の墨書あり）が本堂として礼拝の中心となった。

**四**瑠璃壇　当麻寺の境内の西にある曼荼羅堂（本堂）内陣には、寛元元年（一二四三）に螺鈿を施した須弥壇がある。ここに当麻曼荼羅を納めた扁平六角形の厨子が安置されている。

**五**浄土九品　阿弥陀如来の極楽浄土に往生する者が、上品上生〜下品下生まで上中下各三層の九階級に分かれるところから、極楽浄土を九つに分けた。当麻曼荼羅は、唐の善導の『観無量寿経疏』に基づいて浄土九品の変相図を描いたもの。公条一行は曼荼羅堂に参り瑠璃の須弥壇めぐりをして当麻曼荼羅を拝んだ。

**六**さほ姫のをれるころもは八重桜九しなには手やのこしけむ　春のの女神の佐保姫の織った衣が八重桜であるように、中将姫は浄土九品を描く曼荼羅を織りあげて巧みな手法を残したのだろうよ。（「八重桜」の八と「九しな」の九は縁語。）

**七**染殿　北葛城郡当麻町染野の石光寺（染寺とも）には、中将姫が曼荼羅を織るため蓮糸を染めたという伝承の染殿井がある。『大和名所図会』に「染殿井　染野寺の前にあり、かの蓮糸を染めし所といへり」とある。

**八**あだの大野　阿陀大野か。阿陀大野は五条市東部、吉野川沿岸の地。歌枕。萩の名所。『万葉集』に「真葛原なびく秋風吹くごとに阿太の大野の萩の花散る」（巻十、二〇九六）とある。この紀行では三月二日の室より高野山へ向う途中か、その翌日の帰路に通過したことになる。公条の記憶違いであろうか。

**九**兎葵燕麦春風に動揺す　菟（兎）葵燕麦は家楡（節分草）と烏麦を当てる。有名無実のたとえ。『唐書』劉禹錫伝の遊玄都観詩序に「始謫十年還京師、道士植桃其盛若霞、又十四年過之、無復一存、唯兎葵燕麦動揺春風耳」とあり、『中華若木詩抄』中巻には「唐ノ劉禹錫、郎州ノ司馬ニ貶セラレテ十年バカリアリテ、後京へ召ノボセラレタリ。其時玄都観ヲ見タレバ、桃花ヲウヘナラベテ、盛ニ開ケテ、アタリヲハライテ見コトナリ。是ハ何人ガ栽タルゾト云ヘハ、道士ガアリテウヘタルト云ソ、ソコテ劉禹錫ガ詩ヲ作也（略）其後又左遷セラレテ十四年ヲ経テ京ヘノボル。其時又コノ玄都観へ遊テアレバ、千樹ノ桃ハ一株モナクシテ、アレハテヽ、兎葵燕麦ノ春風ニ吹キナビカサルヽマデ也」とある。

**一〇**あだなれやあたの大野をけふみれは麦はむ馬のあとはかりして　残念なことだ、阿陀大野を今日訪ねて見ると有名な萩などはなくて、かの劉禹錫が玄都観に遊ぶ故事のように春風に揺れた麦を馬がたべた跡ばかりなのだ。

一一糸をそめ給へる池　現在、石光寺は牡丹の名所で、境内一帯に所狭しと牡丹を植えているが、その中に中将姫が蓮糸を染めたという伝承の染井戸がある。

一二糸を懸ほし給ひし桜　染井戸の横に今も糸懸けの枝垂桜が植えられている。

一三片岡清水明王院　北葛城郡香芝町今泉清水にある志都美神社の神宮寺。明治維新に廃寺となった。片岡は北葛城郡上牧町下牧の西部から香芝町東部にかけての荘園名。

九日あしたに出立ぬるに明王院のあるし。あした[一]の原まて壷をたづさへてきたれり。むかい[二]の峯なと云嶺うちかすみて。まことに名ある所のさまなり。人々歌あり

紹巴[1]

[三]かすみけりあしたの原はあけぼのゝ春をむかひの峯にのこして

[四]おき出るあしたの原の名残あれや春の一夜をふせるたび人

今朝しも余寒[五]けしからざるに。あたゝめ酒[六]にあらさる盃をひかへて

紹巴

[七]春ながら身にしみけりなのみこむもあしたのはらはひやさけにして

あしたの出立[八]つねよりもとりつくろひたるに。あしたの腹とよめるはいかゝとて。かの人にかはりて申かけけり

[九]しなてるやかた岡ほどの飯をくひてあしたのはらといかでいふらん



をの〳〵かへりみ[2]せられて立別れぬ。是より達磨寺[一〇]にまいりぬ。達磨太子の像ならびおはしけり[3]。かたはらに二[一一]の大石あり。一はふしたる石にて達磨の姿を残し。一は立たる石太子の御かたちと申せり[4]。是よりむかひに一の石あり。春日大明神[5]　影向の石[6]といへり。さて法隆寺[一三]にと心さしけり。南無仏[一四]の御舎利出給ふ時刻定まれり。をそくもやとて駒打はやめ参りけるに。舎利講式[一五]三段[7]よまれたる時分[8]にて聴聞随喜せしに。事のおはりに舎利出おはしましけり。此寺の脇坊[一六]とて年老ことをかしき人内陣[一七]へ参へきよし申せしかは。参りて霊宝どもおかみ奉る様々の物あり。中にも梵網経[一八]御身の皮を外題の紙に用ひ[9]。御血にて銘をあそはしたる御経たぐひなく覚侍り。かくて龍田[一九]に行てとまりぬ。日暮かたに立出て社頭にまいりぬ[10]。此あたりの名所ともをしへられけり。ならしの岡[二〇]神なひ[二一]龍田川[二二]いはせ[二三]小くら山[二四]などみわたしけり。此と[二五]ころのぬし[11]たる人廿あまりなるいて来て物語しけり[12]。親ある人なり。父[二六]は慈あり子は孝ありて今の世にはたぐひすくなきよし聞えけり。歌の道に心さしあるよし聞えしかは。二首の題を出して人々よめり

落花随風

[二七]枝にまたかへらぬはなを吹かへしかせさへさすがおしむとそ見る

名所春曙

[二八]なごりあれや明ほのかすむたつた山夜半にもこえてみるへき物を

暁にいたりてゆふつけ鳥[二九]の声〳〵きこえ。所のさま身にしめり[13]。

〔校異〕1紹巴〈類〉ナシ、次の「おき出る……」の歌に紹巴とある。2かへりみせられて〈類〉顧をときて。3けり〈類〉ける。4申せり〈類〉申ける。5〈類〉のアリ。6の〈類〉ナシ。7式〈類〉

弐、〈神〉弐、〈東〉二。8れ〈類〉せ。9用ひ〈類〉用之。10ぬ〈類〉ナシ。11ぬし〈類〉あるし。12けり〈類〉ナシ。13しめり〈類〉しみけり。

〔語釈〕

**一**あしたの原　朝原。歌枕。片岡の朝原とも。北葛城郡香芝町今泉付近。「あすからは若菜つまむと片岡の朝原は今日ぞ焼くめる」（『拾遺集』巻一春・人丸）

**二**むかいの峯　所在未詳。『万葉集』に「片岡のこの向つ峯に椎蒔かば今年の夏の蔭にならむか」（巻七、一〇九九）とある。

**三**かすみけりあしたの原はあけぼのゝ春をむかひの峯にのこして　なんと美しい春霞にかすんでいることよ。この朝原は名のように朝になって明けたが、曙の春の朝日を向うの峯に残したままで。（「春のくるあしたの原を見渡せば霞も今日ぞ立ちはしめける」（『千載集』巻一春上・後頼））

**四**おき出るあしたの原の名残あれや春の一夜をふせるたび人　起出て出発しようとする朝、この素晴しい朝原には名残を覚えることだ、春の一夜を野宿した旅人にとっては。（「ふせる旅人」は後出の注**一〇**に記す聖徳太子伝承歌の「フセル旅人アワレヲヤナシ」による。）

**五**余寒けしからざるに　春になっての余寒がはなはだしいのに。Qexicaranu tenqi　非常に悪い天気（『日葡辞書』）。

**六**あたゝめ酒　暖め酒、燗をした酒、近世以前では燗をせず冷や酒を飲むのが一般的であったが、身を暖めるため燗をした。『和漢朗詠集』に「林間煖酒焼紅葉」（巻一、秋興）がある。

**七**春ながら身にしみけりなのみこむもあしたのはらはひやさけにして　春とはいうものの身にしみることだ、飲みこんでも朝原で飲む冷や酒は腹を冷やすので。

**八**出立つねよりもとりつくろふ　出発にあたっての歓送が普通よりも丁重であった。

**九**しなてるやかた岡ほどの飯をくひてあしたのはらといかでいふらん　聖徳太子の伝承の飢人のように飯を食べて、どうして「あしたのはら（腹と掛詞か）」というのであろう（歌意未詳）。（「しなてるやかた岡ほどに」は次の注**一〇**に記す聖徳太子伝承歌「シナテルヤ片岡山ニ」による。）

**一〇**達磨寺　北葛城郡王寺町本町　山号片岡山。本尊達磨大師・聖徳太子。寺の創建は、聖徳太子と達磨大師の歌の贈答及び達磨大師埋葬の伝承による。例えば『沙石集』に「聖徳太子ハ……或時、片岡山ヲスギ給ヘルニ、御馬スヽマズ。アヤシミヲナシテミ給ヘバ、異相ノ僧一人飢テフセリ。御馬ヨリヲリテ、御物語アリテ、紫ノ袍ヲヌギテヲヽヒ、又和歌ヲタマヒケリ。　シナテルヤ片岡山ニ飯ニウヘテフセル旅人アワレヲヤナシ　御返事、イカルガヤ富ノ緒河ノタヘバコソワガオホキミノ御名ハワスレメ　彼飢人ハ達磨大師ナリ。」（巻五）とある。聖徳太子と飢人の説話は既に『日本霊異記』（上巻）に見え、贈答の二首は『拾遺集』（巻二十哀傷）に載る。後日この飢人（達磨大師）が亡くなり、埋葬の地に達磨寺が建立されたという。

**一一**二の大石　達磨寺本堂の前、南西隅に傾いて立つ石（達磨大

師）と直立する石（聖徳太子）が現存する。寺ではこの両石を問答石と呼ぶ（写真参照）。

**一二**春日大明神影向の石　『大和名所図会』には本堂の東に「春日ようごう石」が描かれているが、神仏分離令以後、同町片岡神社に合祀されたという。

**一三**法隆寺　生駒郡斑鳩町。推古天皇十五年（六〇七）または同二十一年、聖徳太子により建立。南都七大寺の一。

**一四**南無仏の御舎利　聖徳太子二歳の春二月十五日、東方に向い「南無仏」と唱えて合掌すると、掌に釈迦仏の眼が入っていたという。この舎利を「南無仏の御舎利」と称し、舎利殿に安置している。舎利殿は東院伽藍、夢殿の北にある鎌倉時代建造物（国重要文化財）で右が舎利殿、左が絵殿である。『御順礼記』に「舎利堂は護持堂といふ。毎日午の上刻に鯨口七声を限りて舎利講をはじめ、錦袋七重をひらき玉塔の舎利を出さるゝ」とある。現在は正月三ケ日に午後一時より舎利講式が行なわれ、水晶の五輪塔の舎利器が出される。

**一五**舎利講式　講式は法会で仏・菩薩・祖師などの徳をたたえる漢語調の和文の声明。平安中期にはじまり、中世の民衆布教に役立った。舎利講式は明恵上人作という『四座講式』（舎利講式のほか涅槃講式・羅漢講式・遺跡講式）が有名であるが、法隆寺には法隆寺伝来の舎利講式がある（『聖徳太子全集』五　聖徳太子講式など）。

**一六**脇坊　本寺に属する塔頭、脇寺とも。ここでは法隆寺の塔頭。

**一七**内陣　法隆寺舎利殿の内陣。内陣は社寺の本殿や本堂の内部を前後に分けた後部（前部は外陣）。内陣に神体や本尊を安置する。仏教寺院でこの建築様式が発達するのは平安時代の密教興隆以降である。法隆寺舎利殿の建築様式・内陣内部については『大和六大寺大観』（岩波書店）『秘宝』（講談社）に写真が掲載され、詳しい。

**一八**梵網経　鳩摩羅什の漢訳という二巻の経典、菩薩の守るべき戒律を説いたもの。

**一九**龍田　龍田大社。龍田神社は、生駒郡三郷町立野と同郡斑鳩町龍田に両社あり、前者を本宮、後者を新宮ともいう。翌十日の信貴山参詣の記述からして、信貴山に近い、山腹に鎮座する三郷町立野の龍田大社であろう。祭神は天候を司る風神、天御柱命・国御柱命。

**二〇**ならしの岡　毛無岡・奈良師岡。所在未詳。歌枕。『大和名所図会』には「目安村にあり。立田大橋より四町ばかり南の川添にさゝやかなる森あり」とある。目安村は現在斑鳩町目安。「神名火の磐瀬の杜のほとゝぎす毛無の岳に何時か来鳴かむ」（『万葉集』第八、一四六六・志貴皇子）。

**二一**神なひ　神南備山。龍田大社東南の山（三郷町）とも、龍田川と大和川の合流地に臨む三室山（斑鳩町）とも。歌枕。「神なびの山をすぎ行く秋なれば龍田川にぞぬさはたむくる」（『古今集』巻五秋下・深養父）。

**二二**龍田川　生駒市に発し、生駒山の東麓平群谷を南下して大和川に注ぐ川。歌枕。『古今集』以後、紅葉の名所として多く詠まれている。

**二三**いはせ　磐瀬の森。三郷町立野の高山とも、斑鳩町稲葉車瀬の塩田の森とも。歌枕。『枕草子』に「森は、浮田の森、うへ木の森、

岩瀬の森、たちぎきの森」とある。

**二四**小くら山　小椋山。所在未詳。歌枕。「白雲の龍田の山の滝の上の小椋の嶺に咲きををる桜の花は山高み（下略）」（『万葉集』巻九、一七四七）。

**二五**　此ところのぬしたる人　公条一行の宿所が三郷町立野の龍田大社であったとすれば、「ぬしたる人」は興福寺大乗院方国人である立野氏かと思われる。現在は宅地造成のため破壊されたが、室町時代に築造された立野城跡が存在した（『日本城郭大系』10）。なお立野氏が大乗院方国人であることは、三月二十五日条の大乗院尋円との会見、同二十六日条の大乗院方国人楊本氏との交渉など、大和における公条の行程が大乗院に関係深いことに留意すべきである。

**二六**父は慈あり子は孝あり　『礼記』礼運篇に「父慈子孝兄良弟悌夫義婦聞」とある。

**二七**枝にまたかへらぬはなを吹かへしかせさへさすがおしむとそ見る　枝には再び帰ることのない落花を吹も返しているのは、風までもさすがに美しい花を惜しんでいるのだと思われる。

**二八**なごりあれや明ほのかすむたつた山夜半にもこえてみるへき物を　このままでは名残おしいことだ。曙の春霞にかすむ龍田山の景色は夜中にも越えて来て眺めるべきものだ（「風吹けば沖つ白浪たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ」〔『伊勢物語』二十三段〕をふまえる）。

**二九**ゆふつけ鳥　木綿付鳥。鶏の異称。謡曲『鶏立田』などに見えるように、龍田神社（三郷町・斑鳩町の両社とも）では鶏を神使としている。この一文も関連あるか。

十日[一]信貴山にまいるへきとて出立ぬ。彼あるじの父なる人さきに[1]立て。龍田山[二]にて松の枝を引たはめて茶甕[2]をつり。やかて松の古葉松かさなど云あたりに落たる薪にひろいたき。茶具なと興ある物とも酒肴さま〳〵もたせて待居たり。あまたたび盃めくり茶なとすゝめてたちぬ。信貴山にいたりて福生院[三]と云ともなひきける[3]。毘沙門[四]につきてその名もたよりありとて本堂にあかりぬ。かけつくり[五]三方のこる所なく見えて勝境たぐひなし。これより河内国八尾木[六]の金剛蓮華寺[七]と云寺をさして行きつきにけり。

十一日けふ住吉[4][八]へとぞ思ひ立ける。こゝなる人のいふやう此八尾[九]と云所は鷲のたちなり[一〇][5]。よのつねのは尾十二まひかさなれり。此所のは尾を八かさねすくれたるよし申けり

[一一]ちきりをきてこゝにそきかんうくひすも八尾の椿[6]やちとせのこゑ[7]

是より[8]神べう[一二]むくの木のある寺にまいり[9]。彼木のもと[10]おかみ本堂へ参り太子の御影開帳はなきよしかたりしかと。案内しれる人ひそかに申てひらきけり

[一三]へたてをくとばりかゝげてむくの木のむくつけきまてむかふおもかけ

紹巴

[一四]いにしへのあとも木ふかきなかとめて[11]こまひきむ[12]くるはるのわか草

住吉[13][一五]にまうでけり。日よくはれて参詣の人々袖をつらね。松原こゝかしこさかもり歌うたひ心ちよけなり[14][一六]。浦のさまをみれは塩はる〳〵

とひて。男女貝ひろふとて出たるあかすながめ入て

[一七]ながゐすなとばかりいひしあまひとをうらみてかへるすみよしの
波[15]

袖[16][一八]の色にふかくそめける[17]住の江のきしかたの身はみなわすれ草　紹巴[18]

[一九]よりくるもたれかはきかむすみの江やふかきすみか[19]にしつむゆふ
なみ

浦のけしき立うきを帰る波にひかれて。[二〇]天王寺におもむきて[20]しるたよりもなくて[21]はいかゝとおぼえしに。[二一]唯今の別当なる大覚寺の御内なる野路井と云人に行あひてければ。[二二]薬師寺と云所にやどしてさま〳〵のもてなしあり。誠に太子の出[22]むかへるかとそ覚えし。かつは別当の御心さしの行衛とそおほへ侍る。やがて所〳〵拝みて帰りぬ。[二三]亀井の水のもとにて[二四]神仏亡者なとに水まいらせなどして

[二五]あしきみち六をかくせる亀の水五のにごりこゝにすまさむ

あかつき[二六]難波寺の鐘とて心もすますへきを。日比のつかれにやきかさりしを。紹巴おどろかしけり。いきたなき[二七]慚愧のおもひをなせり

[二八]かへるへき道しるへしてかりまくらゆめどのちかきかねの声〳〵

〔校異〕 に〈類〉ナシ。 2つり〈類〉つくり。 3ける〈類〉けり。 4〈類〉はアリ。 5たち〈類〉名処。 6も〈類〉の。 7〈東〉椿や八千とせ。 8〈類〉とかきをきてアリ。 9〈類〉てアリ。 10〈類〉をアリ。 11とめて〈類〉とても。 12むくる〈東〉とむる。 13〈類〉かくてアリ。 14浦〈類〉爰。 15波〈東〉うら。 16〈東〉「袖の色に……」歌ナシ。 17ける〈類〉けり。 18紹巴〈東〉ナシ。 19すみか〈類〉霞。 20て〈類〉ナシ。 21て〈類〉ナシ。 22出むかへる〈類〉出むかひ給る。



〔語釈〕

**一**信貴山　生駒山地南部の山、生駒郡平群町信貴畑。信貴山朝護孫子寺（信貴山寺）がある。本尊毘沙門天。創建については、聖徳太子が寅年寅月寅日寅刻に毘沙門天を感得し、堂宇を建立したという伝承がある。『信貴山縁起絵巻』や『今昔物語』でよく知られている飛倉や延喜加持の命蓮は中興の祖という。

**二**龍田山　生駒山地の南部、大和川北岸の山。信貴山の南にあたる。歌枕。『伊勢物語』二十三段の龍田越はこの山地を通る大和・河内間の幹道。

**三**福生院　未詳。朝護孫子寺の塔頭の一か。

**四**毘沙門　毘沙門天、多聞天とも。四天王・十二天・七福神の一。信貴山朝護孫子寺の本尊。

**五**かけつくり　懸造、山地などの傾斜面に張り出して建てる建造。崖造・舞台造とも。京都の清水寺本堂の「清水の舞台」など有名。Caqezzucuri 片方はしっかりした所に、片方は低い所とか険阻な所とかに造った建築。たとえば海とか絶壁とかなどに臨んで造った建築（『日葡辞書』）。朝護孫子寺の本堂は南斜面の懸造で、西に奈良盆地、南に二上山・葛城山が眺望できる（写真参照）。

**六**八尾木　大阪府八尾市八尾木（よおぎ）。天平神護元年（七六五）称徳天皇行幸の由義宮（ゆげのみや）はこのあたりに推定されている。

**七**金剛蓮華寺　創建は神護景雲年間という。室町時代末まで存続

し、近世以降廃寺。遺跡は八尾木の善立寺付近といわれている。

**八**住吉　大阪市住吉区住吉町。ここに住吉大社がある。八尾木より西へ約十一キロメートル。

**九**八尾　八尾市。地名由来については、古代、軍事を担当した物部氏の根拠地がこのあたりにあり、兵具の「矢負」または「矢尾」によるともいう。同市東部に同じく武器に由来する「弓削（ゆげ）」の地名がある。

**一〇**鷲のたちなり　八尾の地名が八尾の鷲の形に由来しているというが典拠未詳。後世の『河内名所図会』などは『吉野詣記』のこの記事を引用している。

**一一**ちきりをきてこゝにそきかんうくひすも八尾の椿やちとせのこゑ　縁があって今ここで聞くのであろうか、鶯も常とは違い八尾の椿(翼か)であって、八千歳も囀っている鳴き声を。(『続紀行文集』所収本には「八尾の翅」とある。)

**一二**神べうむくの木のある寺　神妙椋樹のある寺。椋樹山大聖勝軍寺。八尾市太子堂。本尊聖徳太子。聖徳太子廟のある南河内郡太子町の叡福寺を「上の太子」と呼ぶのに対し、「下の太子」とも呼ぶ。寺院創建については、用明天皇二年(五八七)仏教伝来をめぐり崇仏派の聖徳太子・蘇我馬子は排仏派の物部守屋を稲城に攻めたが一時敗北し、聖徳太子は難を椋樹の蔭に遁れた。戦勝後、この地に寺院を建立したという。境内には現在も椋樹が植えられている。

**一三**へたてをくとばりかゝげてむくの木のむくつけきまてむかふおもかけ　隔てている帳を掲げあげて、椋の木のある寺で、むくつけき我々が不遜にも向かいあう聖徳太子の尊顔よ。(「むくの木」は「むくつけき」の序。)

**一四**いにしへのあとも木ふかきなかとめてこまひきむくるはるのわか草　聖徳太子の昔の跡を示す椋の樹が木深く茂った下に駒を引いてやって来た、春の若草の生える中を。

**一五**住吉にまうでけり　住吉大社は摂津一宮。祭神は海を司る底筒男命・中筒男命・表筒男命と神功皇后。海神とともに軍神及び歌の神として崇敬され、平安時代より朝廷や公家たちの参詣があった。歌枕。実隆の『高野参詣日記』に「これより住吉社にまうてゝ、御神楽まいらする。十首歌奉納せしめ、ところ〳〵ふしおかみて、神宮寺にまうてゝ、さらに御前の橋より松原に出て、浜のわたり逍遥して　このまゝに住よしといひて故郷は忘れ貝をもいさやひろはむ」とある。

**一六**浦のさま　住吉大社社頭の海岸の景色。現在の海岸線は埋立てによって住吉大社より西へ八キロメートル以上延びているが、近代以前には社頭のすぐそばに海浜があった。住吉の浦・住之江・岸の姫松・忘れ貝などと歌に詠まれる。

**一七**ながゐすなとばかりいひしあまひとをうらみてかへるすみよしの波　長居するなといった漁師を恨みながら、住吉の浦の景色を眺めて都へ帰ることだ、寄せては返す波のように。(「住吉と海人はつぐともながゐすな人忘草おふといふなり」(『古今集』巻十七雑上・忠岑)をふまえる。「あま」「浦」「波」は縁語。「恨み」と「浦見」を掛ける。)

**一八**袖の色にふかくそめける住の江のきしかたの身はみなわすれ草

墨染の袖の色に深く染めた我が身は、これまでの来し方のことを、住の江の岸に生える忘れ草のように、皆忘れてしまった。（「道しらば摘みても行かむ住之江の岸におふてふ恋忘れ草」（『古今集』巻十四恋四・貫之）をふまえる。「住の江」と「墨」、「住の江の岸」と「来しかた」を掛ける。）

**一九** よりくるもたれかはきかむすみの江やふかきすみかにしつむゆふなみ　寄りくる波の音を誰れが聞くであろうか、ここ住の江の深い霞に沈んで行く夕波を。（「すみか」は校異〈類〉「霞」による。「寄り来る」「江」「波」は縁語。）

**二〇** 天王寺　四天王寺。大阪市天王寺区四天王寺町。聖徳太子創建。中世においては聖徳太子信仰と浄土信仰があいまって貴賤の天王寺詣が盛んであった。

**二一** 唯今の別当なる大覚寺の御内なる野路井と云人　歴代の四天王寺別当には青蓮院・聖護院・大覚寺等の門跡が兼務したが、この時代の別当については不明である。『天王寺誌』に「従ニリ延文四年一至ニマテ慶長五年ニ二百四十有二年之間梶井忠雲僧正以下或梶井宮或青蓮院宮或曼珠院宮或大覚寺宮或聖護院宮連綿雖レトモ任ニンスト別一当ニ任職ノ記紛失而無レシ所レロ考ニルニ年暦一ヲ因テ闕ニ其伝一ヲ矣」とあり、原本付箋に「天文元年ヨリ廿二年迄凡廿二年之間青門主御寺務同四卯弘治元年ヨリ永禄二未年マテ五年之間大覚寺御寺務永禄三申之歳ヨリ慶長四亥之年マテ四十年之間青門主御寺務慶長五ヨリ十二未之年マテ八年之間大覚寺御寺務」とあり、更に別の付箋に「大覚寺門跡（弘治元年至永禄二年）按西三条称名院公条卿高野詣記云今之別当大覚寺宮由此則其補別当実在天文廿二年以前無疑矣而今云弘治元年何那」とある。

**二二** 薬師寺　四天王寺塔頭の薬師院か。『天王寺誌』に「椎寺　処ハ寺内北隅門外也、称レスラク世椎寺ハ伝教建立之処ト検ルニ日記一ヲ椎寺者椎ノ宮ノ伝教ノ建立ハ椎宮境内之薬師院普門院之両院也」とあり、『摂津名所図会』に「椎寺　北の門の側にあり。伝教大師の御建立なり。昔此地に大木の椎樹有りしを伐って、大師手から本尊を作り給ふ。椎の寺と号く。本尊薬師仏（下略）」とある。

**二三** 亀井の水　四天王寺境内にある亀井堂の井。井水は金堂の下より湧き出るという。歌枕。実隆の『高野参詣日記』に「亀井の水を掬て　まれにきて結ぶ亀ゐのみつからやうき木にあへるたくひなるらん」とある。

**二四** 神仏亡者なとに水まいらす　現在、亀井堂では亡くなった人の改名を書いた経木に井水を掛けて供養している。

**二五** あしきみち六をかくせる亀の水五のにごりこゝにすまさむ　六道の怖れを底に隠して清く澄んでいる亀井の水で五逆の罪の濁りをここで洗い澄ませよう。（六道は地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天の六つの世界。五逆は、害父・害母・出仏身血・害阿羅漢・破和合僧の極悪な五つの罪。「にごりなきかめ井の水を結びあげて心のちりをすゝぎつる哉」（『新古今集』巻二十釈教・上東門院）などをふまえる。）

**二六** 難波寺の鐘　四天王寺の鐘。難波寺は四天王寺の異称。謡曲『弱法師』に「難波の寺の鐘の声、異(こと)浦々に響き来て、普(あまね)き誓ひ満ち潮のおしてる海山も皆成仏の姿なり」とある。

**二七** 慚愧　Zangui　きまり悪さ、あるいは恥ずかしさ（『日葡辞

書』)。

二八かへるへき道しるへしてかりまくらゆめどのちかきかねの声

く　都へ帰るべき道中の準備をして、旅の一夜の夢うつつに四天王寺の夢殿近くで聞く鐘の音よ。(「かり枕」「夢」は縁語、「夢」と「夢殿」を掛ける。四天王寺にも、法隆寺と同じように東伽藍に夢殿がある。)

十二日けふ[1][一]みなせまてまかるへき程とをしとていそきけるに。此[二]寺の舎利毎日巳[三]の刻に出させ給へとも彼別当御使たる人ことわり申て朝のほとにいたし奉る。頂戴随喜かぎりなし。僧[2]物語して云やう此舎利は七[四]仏[3]の毘婆尸仏の双眼なり。普[4][五]広院の御時都へめし[5]のぼせられしかは。その間亀井の水とまりて御帰の程より本のことく出ける事。又本尊ちかき乱にくだけ給ひしを続奉るに[6]。御足いさゝかふみちかへてつぎしを一夜の間居なをらせ給ふ事など[6]。近き世にもかやうのふしぎ有よしかたりけり。秋[六]野と云人道まて送りにとて。楼[七]のきしわたなべ[7]大江まて酒をもたせてきけり[8]。川のほとりにて数盃をかたふけ。こし[9]にて夕つかた山[八]さきみなせ[九]に着にけり。いまた日も残れり和漢[一〇]一折すべきと有しかは

[一一]雲やいづれやまさきかくす[10]花さくら

[一二]迎ﾚﾃ客ｦ燕談ﾚ春ｦ　　[一三]水無瀬三位

[一四]雨の日やゆふへの空もをそからむ

十三日早朝に御影[一五]堂に参れり。男[一六]山八幡にまいり帰るさ釈[一七]迦のおはします堂にて[11]。ある人酒すゝめてかへりぬ。此程の旅のつかれゆへ心ちあしくてけふはふしくらしけり。

〔校異〕　1〈類〉はアリ。2僧〈類〉寺僧。3の〈東〉ナシ。4〈類〉傍書「義教」アリ。5めしのぼせられ〈類〉のぼられ。6など〈類〉ナン。7〈類〉のアリ。8きけり〈類〉きたりける。9こしにて〈類〉こゝをたちて〈東〉ナシ。10かくす〈類〉かくる。11にて〈類〉にまかれり、「に」の傍書「にてイ」アリ。

〔語釈〕

一みなせ　水無瀬。大阪府三島郡島本町、四天王寺より東北に直線で約三十キロメートル。注九に後出。

二此寺の舎利　四天王寺の舎利。『天王寺誌』に「金堂入櫃之分一仏舎利　按南北二京霊地集云法隆寺舎利堂ノ舎利ハ諸王分付ノ時左ノ御目睛ナリト云ヘリ　此ノ仏舎利釈尊之左眼也、太子二歳之時自ﾆ左掌ﾆ出現ｼ玉ﾌ仏舎利也、称ス世ﾆ南無仏ノ舎利是也　南無仏舎利二粒一粒安和州法隆寺　右安金堂之内此外有伝来之仏舎利矣」とある。ただしこの『吉野詣記』では「七仏の毘婆尸仏の双眼なり」とある。

三巳の刻　午前十時から十二時ごろ。現在、四天王寺では毎日午前十一時より金堂において御舎利出しが行なわれている。

四七仏の毘婆尸仏　七仏は釈迦牟尼が世に現われる前に出た仏に釈迦を加えた過去七仏。毘婆尸仏はその最初の仏。ほかに尸棄仏・毘舎浮仏・拘留孫仏・倶那含尼仏・加葉仏・釈迦牟尼仏。

五善広院　足利義教(応永元年〔一三九四〕—嘉吉元年〔一四四一〕)の法号。義教は三代将軍義満の子。はじめ義円と称し、天台座主となったが、将軍義持の死後還俗して六代将軍となった。永享の乱

で鎌倉府の足利持氏を討つなど幕府の権威を高めたが、強引な政策を押し進めたため守護大名たちの反発を受け、赤松満祐に殺された(嘉吉の乱)。

**六**秋野と云人　秋野氏は四天王寺執行職。先祖は小野妹子で、聖徳太子より秋野の号と「天王寺遺言記」を授けられ、四世文人の時、小野院秋野坊勝順と号し天王寺に住み、以来「順」を通字として名乗り四天王寺執行職を継承したという(『天王寺誌』秋野家系)。この吉野詣の時の秋野氏は第三十六世亨順にあたる。「秋野家系」に「亨順　大永三年産、天文十八年継二家督一、天正四年五月三日織田信長公放二火于伽藍一没二収寺領一、天王寺既及二滅亡一、亨順独飢不レ豊食臥不レ煖、被レ経二歴二十有余年一勧二進諸国一、文禄三年謁秀吉公請再興伽藍、秀吉公下命再興伽藍付寺領、此時以中興開山之功補惣別当執行政所如旧、慶長五年六月八日死、享年七十六、号来林院」とある。大永三年生れであるので、この吉野詣の時は三十一歳である。

**七**楼のきしわたなべ大江　楼の岸・渡辺・大江。いづれも大阪市内の古代・中世に見える地名。現在の大阪市東区の淀川沿岸(天満橋・天神橋あたり)を比定する説もあるが未詳。歌枕。「渡江や大江の岸にやとりして雲井に見ゆる伊駒山かな」(『後拾遺集』巻八・良暹法師)。渡辺は渡辺党の根拠地、庄園に大江御厨があった。

**八**山さき　山崎。京都府乙訓郡大山崎町及び大阪府三島郡島本町山崎、天王山の南麓、南に水無瀬がある。山城と摂津の国境で、天王山と淀川の狭間を西国街道が通り、古代より交通の要衝の地。

**九**水無瀬　平安時代より朝廷の狩猟地があった。『伊勢物語』にも見え、また後鳥羽上皇の離宮があった。歌枕。「見渡せば山もとかすむ水無瀬川夕べは秋となに思ひけん」(『新古今集』巻一春上・後鳥羽院)。後鳥羽上皇を祀る廟があり、土御門上皇・順徳上皇も祀る水無瀬神宮となっている。



**一〇**和漢一折　和漢聯句。五言の漢詩を交えた連歌。和句を発句に詠むもの。漢句を発句にする場合は漢和聯句という。和漢聯句は室町時代から江戸時代初期、朝廷・公家を中心に盛んであった。一折は百韻中、初折表裏の二十二句。

**一一**雲やいづれやまさきかくす花さくら　雲はいづれであろうか、山崎あたりの山を隠すように咲いている桜の花よ。(「山崎」と「咲き隠くす」を掛ける。)

**一二**迎レテ客ヲ燕談レ春ヲ　遠来の客を迎え、雲と紛うばかりの山崎の桜を眺めながら、くつろいで春の情趣を語り合おう。

**一三**水無瀬三位　水無瀬親氏、後、兼成(永正一一年〔一五一四〕―慶長七年〔一六〇三〕)。『公卿補任』天文十六年条に「藤親氏　前三木従二位英兼卿男。実入道前右大臣藤公条公二男。母同権大納言実澄卿」とある。即ち、公条は水無瀬家を継いだ実子親氏を尋ね。旅の最後の日をくつろいだのである。なお水無瀬氏は、信成・親成父子の代、後鳥羽上皇の遺領として水無瀬離宮を賜わり、御影堂を設け、以来ここを居住とした。

**一四**雨の日やゆふへの空もをそからむ　春雨の降る日は、永日のこととて夕空も暮れるのが遅い。主客ともにゆっくり語り合おう。

**一五**御影堂　後鳥羽上皇を祀る。現在は水無瀬神宮となる。

**一六**男山八幡　石清水八幡宮。京都府八幡市八幡高坊。祭神は応神天皇・神功皇后・比咩大神。貞観元年（八五九）宇佐八幡の神託により、大安寺の僧行教が勧進。朝廷や幕府の崇敬を集め、公家たちが参詣した。水無瀬からは淀川の対岸にあたる。

**一七**釈迦のおはします堂　神仏分離以前、石清水八幡宮本殿の北門の外側にあった慈尊院の本堂。通称岩屋堂。本尊釈迦如来。（『男山考古録』）。

十四日水無瀬より輿[1]にて帰りに[2]けり。はつかし[一]の森のほとりにてこしをたてたる所にて。此[3]あたりの名所も大方爰をかきりなりとて

紹巴

[二]たひ衣たち[4]かくればややつれこし身をはづかしのもりの木かけに

返しに[5]

[三]かりそめとおもふ日数もつもりつゝはやはつかしのかけに来に[6]けり

都出し日数廿日になりにけり。かくて東寺[四]南大門[7]まで都よりむかへに人〳〵来り。是より乗物を[8]返しうちつれ帰にけり。道すから障礙なく帰りし事など申て野宮[五]の寺より出立[9]しかは。此に帰りつきていつしか余波[六]おしげにてみな別にけり。やがて立帰りても独すみの床[七]もあれて道すがらの物かたりすへきたよりもなければ

[八]かたるへき事はかず〳〵なみだのみふるき軒端のつまなしのはなぞかひなきや

[九]老の坂のほりくだるもこのたひをかきりとおもふにふかきやまみち

今生の宿望来世の結縁満足するものそ[10]

天文廿二年[11]三月十四日

〔校異〕1輿にて〈類〉久我まで。2に〈東〉ナシ。3此〈類〉その。4たち〈東〉ナシ。5に〈類〉〈東〉ナシ。6に〈類〉て。7〈類〉のアリ。8を〈類〉に。9出立〈類〉立いて。10そ〈類〉なり。11天文廿二年三月十四日〈東〉ナシ。

〔語釈〕

**一**はつかしの森　羽束師森。京都市伏見区羽束師志水町。羽束師神社のあたり。歌枕。「忘れて思ふ嘆きの茂るをや身を恥しの森といふらん」（『後撰集』巻一〇恋二、読人不知）。洛中に近いので「此あたりの名所も大方爰をかきりなり」と記す。

**二**たひ衣たちかくればややつれこし身をはづかしのもりの木かけに　旅衣を着たわが姿を隠したいものだ、旅でやつれたこの身を恥じて羽束師の森の木蔭に。（「たび衣」「たち」は縁語。「恥づ」と「羽束師森」を掛ける。）

**三**かりそめとおもふ日数もつもりつゝはやはつかしのかけに来にけり　ほんのちょっとと思っていた旅程も積り積って早くも帰るべき都に近い羽束師の森の蔭にまで来てしまったことよ。

**四**東寺南大門　京都市南区九条町、教王護国寺。はじめ平安遷都の時、羅城門の東西に東寺・西寺を建立。弘仁一四年（八二三）空海に賜わり、京都における真言宗の中心寺院となった。南大門は創建時の

ものが幕末まで存在したが、明治元年（一八六八）焼失。現在の南大門は三十三間堂（蓮華王院）の西門を移築したものである。

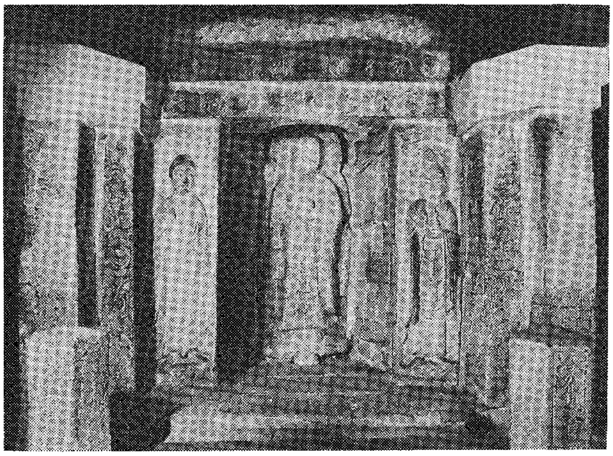
**五**野宮の寺　未詳。

**六**余波　なごり、名残。「余波（ナゴリ）」（『節用集』易林本）。

**七**独すみの床　前年妻を亡くし、独りになったことをいう（二月二十三日条の注**二**参照）。

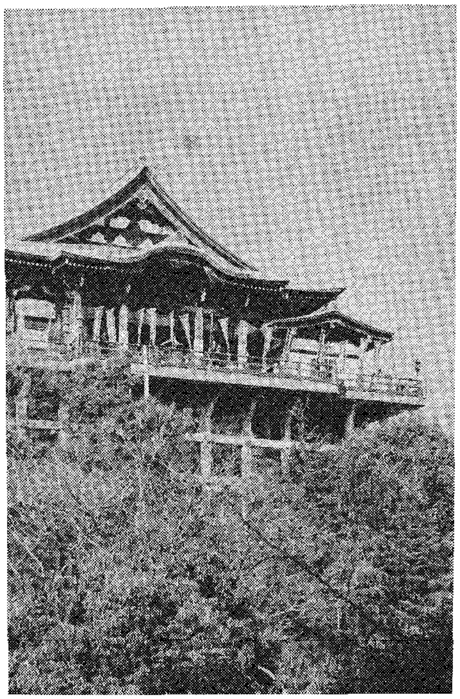
**八**かたるへき事はかず〱なみだのみふるき軒端のつまなしのはな
旅の道すがらの事など話すべき事は数々あるが、話す相手もなく、ただ涙をこぼすだけである。わが家の古い軒端にはつま梨の花が咲いていて。（「つまなし」は梨の異称、「妻無し」との掛詞。「涙のみふる」と「ふるき軒端」を掛ける。）

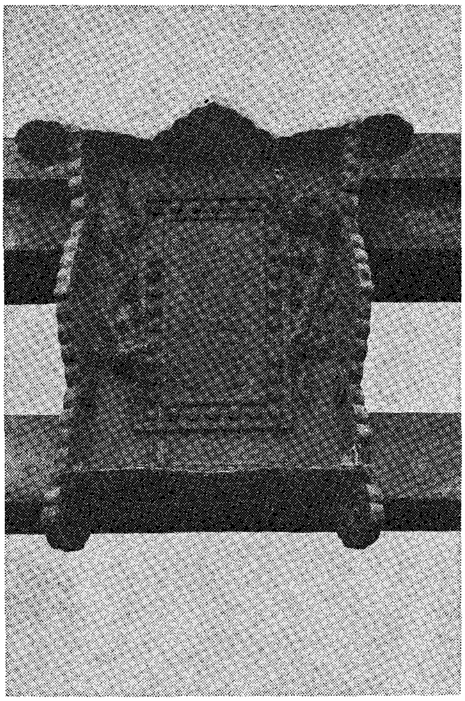
**九**老の坂のほりくだるもこのたひをかきりとおもふにふかきやまみち　人生の老の坂を登った我身には坂を登り下りするのもこの度の旅を限りと思うにつけ、深い山道を歩んで来たことよ。（「この度」と「旅」を掛ける。）



▲ 奈良十輪院本堂の地蔵菩薩石像（２月24日）

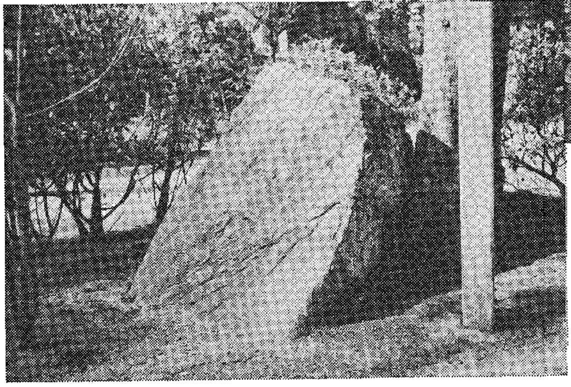
◀ 奈良不退寺の業平肖像画（２月25日）





▲ 吉野の銅鳥居の「発心門」の額（3月5日）

◀ 信貴山朝護孫子寺本堂の懸造（3月10日）



◀ ▲ 達磨寺境内の問答石（3月9日）
上は達磨大師　下は聖徳太子という。